

大林遺跡試掘調査報告書



2002

下呂町教育委員会

大林遺跡試掘調査報告書

下呂町教育委員会

序 文

下呂町は飛騨地域南部に位置し、周囲を山々に囲まれ、町の中央部を益田川が貫流する。当町は、豊かな自然に恵まれた、まさに山紫水明の地であります。町内に湧出する「下呂温泉」は、天下の三名泉の一つとして全国に知られていますが、町名の由来は律令時代の「下留駅」にさかのぼり、町内にはナイフ形石器が出土した初矢遺跡や縄文時代のパン状炭化物で知られる峰一合遺跡など、多くの遺跡が分布しています。町北部にそびえる湯ヶ峰は、石器の材料となる「下呂石」を産出する山として有名で、今回調査した大林遺跡も湯ヶ峰の西麓に位置します。

大林遺跡は、古くから尖頭器や石鎌などの石器や縄文土器が採集され、遺跡としての存在が知られていました。この度「大林地区集落環境整備事業」に伴い、事前に試掘調査を実施したもので、今回の調査では、旧石器時代から縄文時代草創期にかけての多くの石器が出土し、槍先形尖頭器製作址としての当遺跡の一端が明らかになりました。また、「湧別技法」による石核や剥片の出土は、広範な文化交流を物語るものであり、当地の歴史研究にとっても貴重な発見と言えるでしょう。

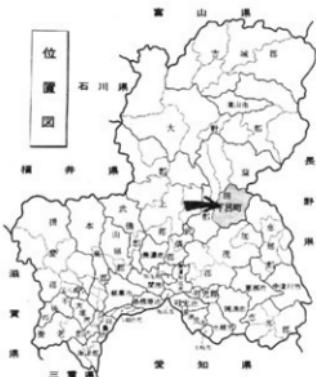
最後になりましたが、今回の調査にあたり、多大なご指導とご協力をいただいた関係諸機関、発掘調査から報告書作成まで主任として係わっていただいた吉田英敏氏（日本考古学协会会员）を始めとする関係の皆様に、深く感謝の意を表するとともに、本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深め、当地の歴史研究の一助になれば幸いに思います。

平成14年3月

下呂町教育委員会
教育長 田口正邦

例　　言

- 1、本書は、国庫および県費補助金の交付を受けて実施した。大林遺跡の試掘調査事業の報告書である。
- 2、本調査は、土地改良事業予定に伴なう事前調査である。
- 3、本調査の事務局は、下呂町教育委員会におき、下記のメンバーである。
教育長（田口正邦）、同課長（田口紀子）、同主幹（酒井昭治）
- 4、本調査の担当は、吉田英敏（日本考古学协会会员）、その補佐を後藤信幸・吉田見代子が行なった。
なお遺物の整理作業については、三島誠、三島美奈代、西村勝広、長屋幸二氏に御協力を頂いた。
- 5、本書の執筆は下記のように行ない、それを吉田英敏が編集した。
第1章第2・3節、第2、4章 吉田英敏 第1章第1節 酒井照治 第3章 後藤信幸
- 6、現場での調査作業員は下記のとおりである。
野村久一、野村政義、中川貫一、小池尚武、太田吉一、細江春彦、長瀬友、長瀬唯、浜田和代、和田登志子、野村隆夫、中川恵以子、桂川栄治
- 7、本書の出土遺物は、すべて共通の通し番号とした。現場でのとりあげ番号との関係は、遺物観察表に明記した。
- 8、遺物の分析については、（株）パレオ・ラボ東海支店に委託して行なった。
- 9、本調査ならびに本書の執筆に際しては、下記の方々にご教示・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する（順位不同）。
吉朝則富、八賀哲夫、長瀬治義、亀貝泰隆、高木宏和、白石浩之、川合剛、大江令、須藤隆司、大竹幸恵
- 10、本書に掲載した出土遺物は、下呂町立ふるさと歴史記念館内に展示・保管している。



目 次

本文目次

第1章 調査の概要		第3章 下呂石の風化と土壌	50
第1節 調査に至る経緯	1	第4章 結語	52
第2節 遺跡の環境	2		
第3節 調査の経過	2		
第2章 出土遺物と接合資料			
第1節 出土遺物	15		
第2節 遺物集中部の分布と接合	48		

挿図目次

第1図 周辺の主要な遺跡	1	第23図 遺物実測図 (K16~18)	35
第2図 地形図	4	第24図 遺物実測図 (K18)	36
第3図 トレンチ設定図	5	第25図 遺物実測図 (K7、13~17、20)	37
第4図 断面図 (1) K1~5	6	第26図 遺物実測図 (N8)	38
第5図 断面図 (2) K6~9	7	第27図 遺物実測図 (N8)	39
第6図 断面図 (3) K12、14、15	8	第28図 遺物実測図 (N8)	40
第7図 断面図 (4) K17、18、20、21	9	第29図 遺物実測図 (N8)	41
第8図 断面図 (5) N3、6、7、9、11	10	第30図 遺物実測図 (N8)	42
第9図 遺物実測図 (K6)	19	第31図 遺物実測図 (N8)	43
第10図 遺物実測図 (K6)	20	第32図 遺物実測図 (N8)	44
第11図 遺物実測図 (K6)	21	第33図 遺物実測図 (N8)	45
第12図 遺物実測図 (K6)	22	第34図 遺物実測図 (N4、7)	46
第13図 遺物実測図 (K6)	23	第35図 遺物実測図 (N9、S1)	47
第14図 遺物実測図 (K6) 折り込み	25・26	第36図 遺物器種別の比較グラフ	49
第15図 遺物実測図 (K6)	27	第37図 N 8 トレンチ西壁の土壌採取部分	51
第16図 遺物実測図 (K6)	28		
第17図 遺物実測図 (K6)	29		
第18図 遺物実測図 (K6)	30		
第19図 遺物実測図 (K6)	31		
第20図 遺物実測図 (K6)	32		
第21図 遺物実測図 (K6)	33		
第22図 遺物実測図 (K14~16)	34		

付表目次

第1表 遺物統計表 (K) 折り込み	11・12	第5表 遺物観察表 (1)	53
第2表 遺物統計表 (N)	13	第6表 遺物観察表 (2)	54
第3表 遺物統計表 (S)	14	第7表 遺物観察表 (3)	55
第4表 土壌統計表	50		

図版目次（カラー）

図版1 大林遺跡空中写真

図版2 K 1 トレンチ, SK 1

図版3 K 6 トレンチ東, 西壁

図版4 K 6 トレンチ遺物集中状況

図版5 K 6 トレンチ南拡張部遺物集中状況

図版6 K 6 トレンチ遺物集中状況

図版7 K 6 トレンチ出土の土器, 石器

図版8 K 6 トレンチ南拡張部の石器

(モノクロ)

図版17 出土遺物（1～13）

図版18 出土遺物（14～26）

図版19 出土遺物（27～38, 42, 44）

図版20 出土遺物（37, 39, 40, 43, 45, 46, 48,
49～56, 59～61）

図版21 出土遺物（47, 57, 58, 62～81）

図版22 出土遺物（82～93）

図版23 出土遺物（94～119）

図版9 K 6 トレンチ南拡張部の西壁

図版10 K 14, 10, 11 トレンチ

図版11 N, S トレンチ群

図版12 N 2, 3 トレンチ北壁

図版13 N 4, 5 トレンチ北壁

図版14 N 6, 7 トレンチ北壁

図版15 N 8 トレンチ西, 北壁

図版16 N 9, 10 トレンチ北壁

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

下呂町は平成11年2月農林省へ平成12年度新規採択要望〔大林地区集落環境整備事業（ほ場整備・農飲雜用水施設整備）〕を提出し、要望どおり採択され、事業が実施されることとなった。以後教育委員会では、当は場整備計画区域は周知の包蔵地遺跡（大林遺跡）であり、文化財保護法のもと、工事に伴う事前試掘確認調査を行わなければならない為、町担当部局（農林課）及び地元関係者と、調査の実施方法、調査の結果は場整備に及ぼす影響等について何度も協議し、平成12年・13年度には営農飲雜用水施設整備事業を実施し、平成13年度には試掘確認調査を実施して、試掘調査の結果をふまえ、平成14年度には場整備を実施することとし、以下の法手続をとり、平成13年7月23日より現地において、試掘確認調査に着手した。

- ・文化財保護法第57条の3第1項に基づく手続

町教委発 平成13年6月22日付 下教第63号 発掘通知の進達

県教委発 平成13年6月28日付 社文第32号の8 発掘通知の進達



1. 大林遺跡 2. 初矢遺跡
3. 峰一合遺跡 4. 上ヶ平遺跡

第1図 周辺の主要な遺跡

第2節 遺跡の環境

岐阜県益田郡下呂町大林集落は標高600～700mにあたり、東方向に存在する湯ヶ峰（1067m）は、小さい鐘状火山として知られている。付近一帯には、石器の材料として最適な、ガラス質の湯ヶ峰流紋岩（通称下呂石）を産出している。

遺跡に該当する地域は、主に南斜面の小川谷の両岸に多散在し、ほぼ西から東方向へ登っている。本遺跡の周辺には、第1図のように初矢遺跡（国府型ナイフ形石器）、峰一合遺跡（縄文前期）、上ヶ平遺跡（縄文早期）などの著名な遺跡が知られている。遺跡は古くから尖頭器をはじめとする下呂石製の石器群や、縄文土器などが地元の方々によって表記されていて、特に野村久一氏のコレクションは貴重な資料である。そして近年、飛騨考古学会旧石器分科会の、吉朝則富氏を中心としたグループによって、平成7年（1995）以後分布の実態が明らかとなりつつあり、遺物の紹介がなされてきた。

上記の分布調査によれば、高所のA地点からD地点の4ヶ所に集中するよう（第2図黒丸）、A地点では、国府型ナイフ、船底形石器（角錐状石器）を主体とするインダストリーと推定している。B～Dは、尖頭器未成品を主に、スクレーパーなどが多数確認されている。なおC地点では、縄文前期に所属する土器片・石鏃、石匙などが若干数含まれている。

第3節 調査の経過

本調査においては、耕地整理の対象となる地域の現状での水田面にトレント群を設定する方法で実施した。図版1空中写真のはば中央部（大林公民館）、西下方向一帯の、野村久一氏所有の土地をK地域、その東上方の中川貫一氏所有の土地をN地域、そして、林野部をはさんださらに東上方部を新聞の地名にちなみS地域としたわけである。なお、Kトレント群は、上記のC、D地点に一部重複する。

調査は、平成13年7月23日より開始し、同年10月30日までの期間において、52日間を要したが、以下にその方法と内容、そして層位について記述する。

【Kトレント群】 トレントは、基本的に幅2m×長さ4mを単位としたが、狭間地や果樹などの条件も考慮し、変則的なところもある。また、K6トレントのような遺物集中部では、拡張してその範囲を明確にした。（304m²）

K1～K5トレント 公民館の真下にあたり、ほぼ東西にトレントを設定した。現状では畠地で、K5の東端からK1の西端にわたって浅い谷状を呈し、多くの礫を含む黒色土層（C層）が厚く堆積している。ところがK2の東からK3、K4にかけては細縫の多い表土が非常に浅く、直ぐ黄色礫土層となってしまい、いわゆる包含層は認められない（第4図）。なお、K1のはば中央北壁に幅120cmの落ちこみ（S K1）が検出されたが、埋土は炭化物を含む有機土で、掘方は黒色土層中（C層）からなされている。遺物は下呂石製剣片2点のみである。縄文前～中期頃の可能性が推測される。

K6、7トレント K4から西へ一段下った旧水田面である。K7の東側方向へは、旧谷川へと至るようでV字形を呈する（第5図）。K6のやや西寄りから、大小の剥片が集中する部分が広範囲に認められた。主に南方向への分布を確認するため拡張した結果、後述するような石器製作址を検出するに至った。詳しくは、石器群の分布と接合関係について後述したい。

K8～11トレント K1トレントから南西方向に一段下った区域にあたり、直交する状態で設定した。第5図にみるように、K9では東側方向で非常に浅く、K8部分では比較的安定した層位が観察できる。K10の一部分にのびた遺物集中部分がみられ、若干拡張したが、狭い範囲内のみであった。K11は包含層のうすい不良の状態を示す。

K12トレント K6の上の段に位置し、やや安定しているものの出土遺物は希少である。

K13、19トレント 旧水田下直ぐに黄色礫混りの地山となり、包含層はみられない。

K20トレント 本群の北東部に位置し、第7図で示すように急斜面である。その南端は旧水田面構築にともなう搅乱穴が存在する。遺物量は希少である。

K14トレンチ K6拡張部の一段下にあたり、第14図のように東方向に包含層が存在し、遺物も淡褐色層（T層）に多く出土している。ただし南北には狭く、K6拡張部からの流れ込みの可能性がつよい。

K21トレンチ 上部（K14）方向からの斜面にあたるため角礫を多く含み、包含層も少なく、遺物も希少である（第7図）。

K15～18トレンチ 本群の南部に位置し、谷川の右岸沿いにあたるため設定した。K18からK17にかけては淡褐色土層（T層）が薄くみられ、遺物も出土したが、第6図に示すようにK15からの傾斜がつよく、遺物は流れ込んで堆積した状況を示している（一点破線の部分）。

以上がKトレンチ群の大まかな内容であるが、地主野村久一氏によれば、表採の主だった場所が、K4からK17方向にのびる舌状部分と記憶しているとのお話から、本来の遺跡は、すでにその包含層が削平されたものと推測されるのである。したがって、K6および同拡張部での石器製作址の検出は、非常に希れな例と考えられる。

[Nトレンチ群] 本群は、Kトレンチ群と異なり、全て階段状の水田面であるため、現在の形状に対応した形でトレンチを設定した。なお、地形図（第3図）にみえる～～状の用水路は、Kトレンチ群のそれと異なり、近年に構築されたものである。本来は、N1とN10の間に存在していたものと推測され、それがK7の東側付近へ結びつくものと思われる。（192.4m²）

N1、2、5、10トレンチ これらは、図示していないが、水田敷面下に黒色土層（C層）はわずかで、淡褐色土層（T層）なども極めて少なく、N1では南へ、N10、2、5では北方向への急斜面が観察され、旧谷川が実証された。なお、遺物なども希少である。

N9、11トレンチ 本群最西部にあたり、西側の崩面を考慮して設定したが、第8図に示すように、K11からかなりの急斜面である。しかし、包含層（T層）はみられ、比較的の遺物が出土しているものの“流れ”状況が看取される。

N3、4トレンチ N3では、急斜面ながら若干包含層がみられるものの極めて薄く、N4では水田構築時の擾乱が著しく、不明瞭であった（第8図）。

N6、7トレンチ N6では、第8図でみるように、前述したN5（北方向）での旧谷川との関係からか、急斜面と擾乱がみられる。N7では比較的に安定し、包含層（淡褐色土のT層）が存在し、遺物もかなり出土している。しかしながら、まとまった状況ではない。上部（東）からの流れ込みであろう。

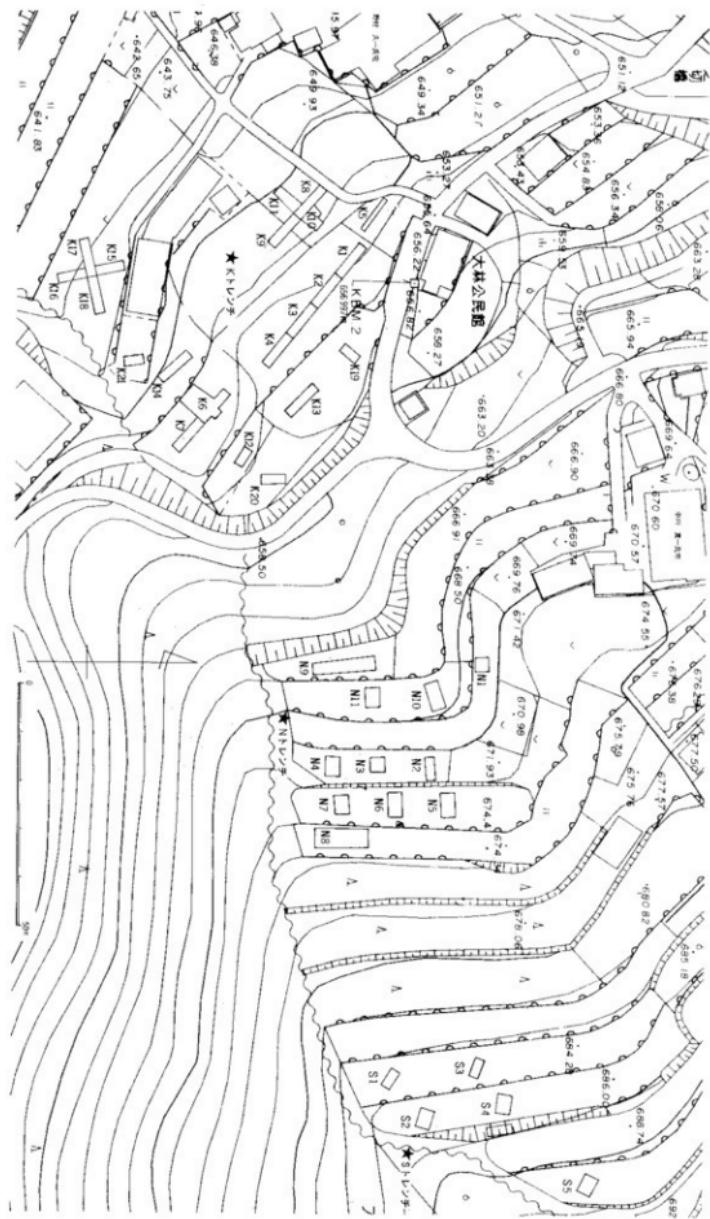
N8トレンチ 南北線上に、幅2mのトレンチを設定したものの淡褐色土層（T層）に至ると、遺物出土量などを考慮し、4mに拡張した。別添第3図で示すように、中央部での浅い谷部を中心として、折り重なるような遺物出土状態をみせた。その詳細については、改めて記述したい。

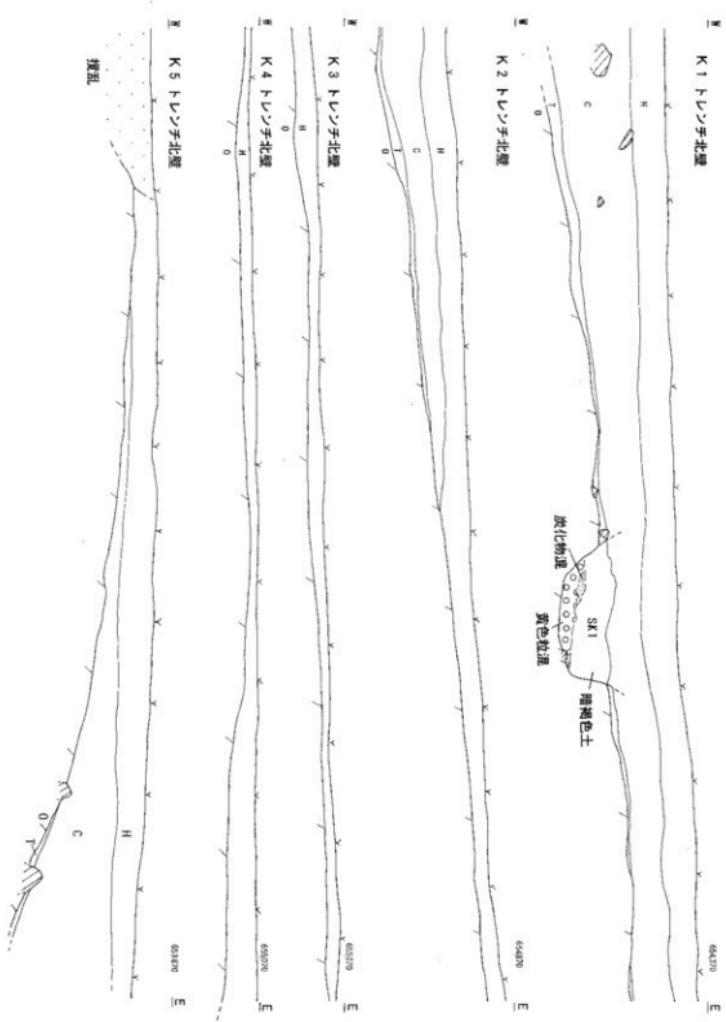
[Sトレンチ群] かなりの高所、急斜面であるが、現状の水田面と旧地形を想定した方向に設定した。ところがS1とS3の一部分に、黒色土層（C層）とわずかな淡褐色土層（T層）をみるのみであった。出土遺物も希少である。（52m²）

第2図 地形図



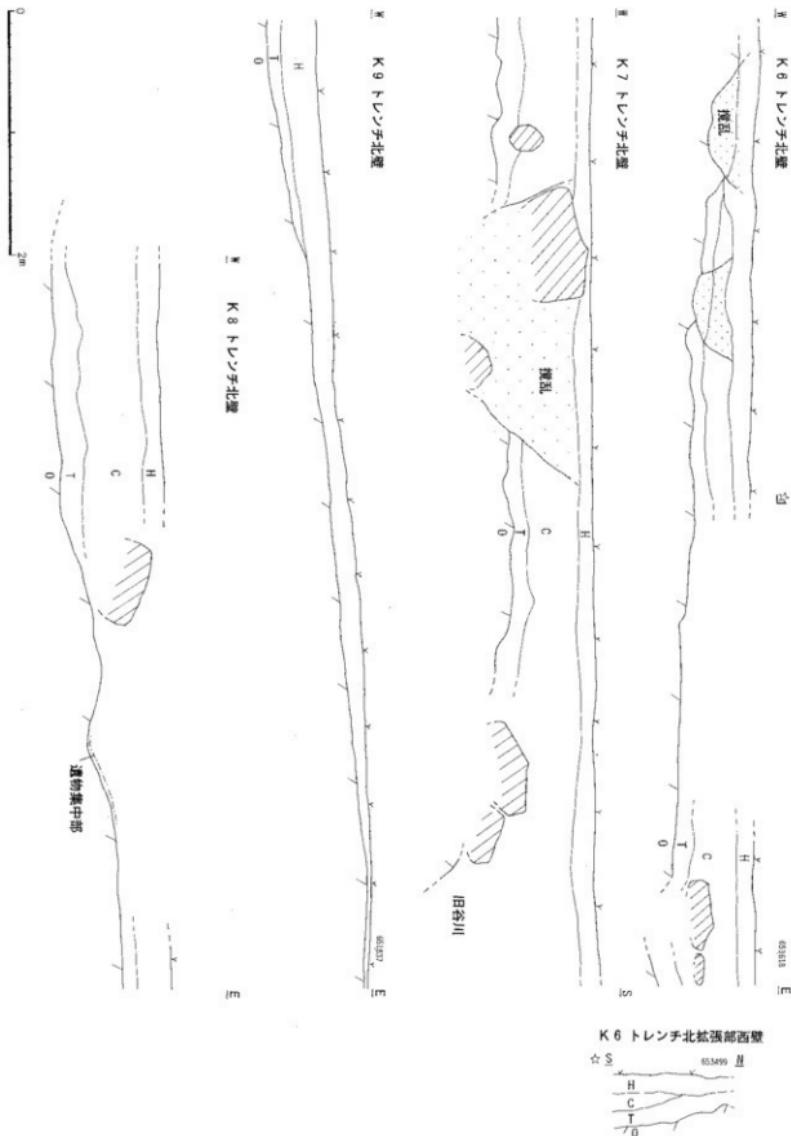
第3図 トレシチ設定図



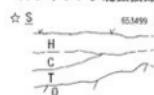


第4図 断面図(1)

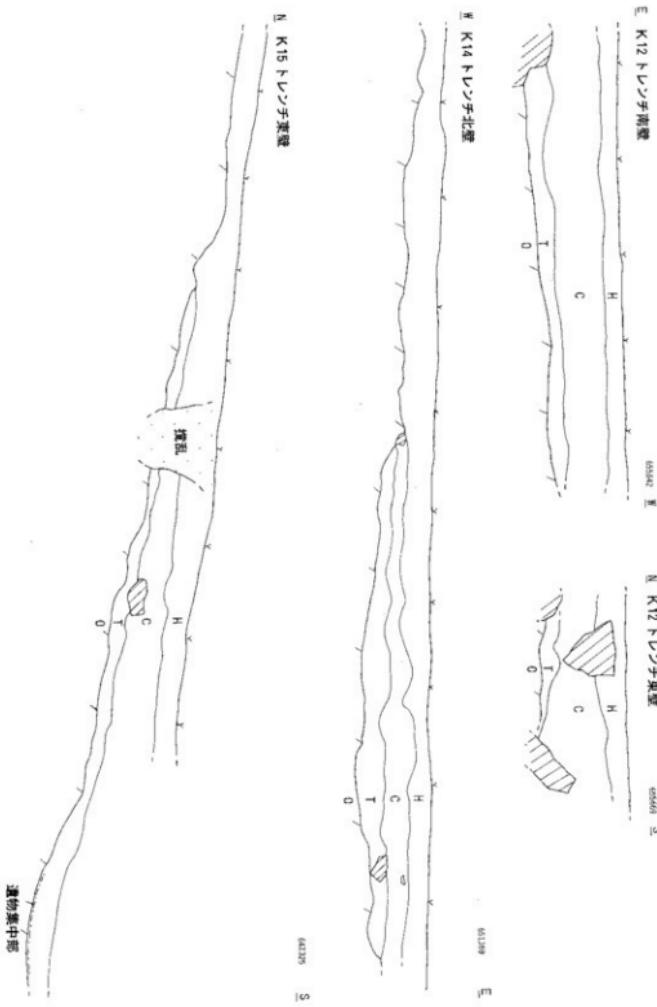
第5図 断面図(2)



K 6 トレンチ北端強部西壁

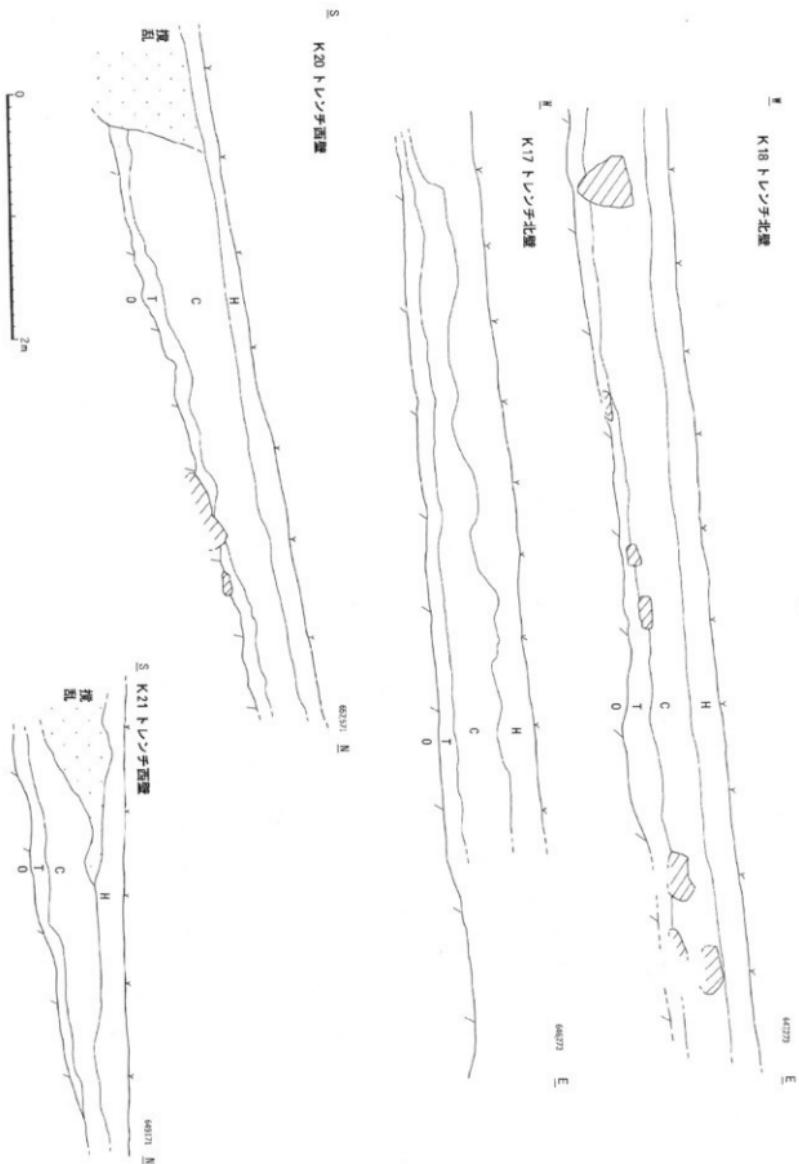


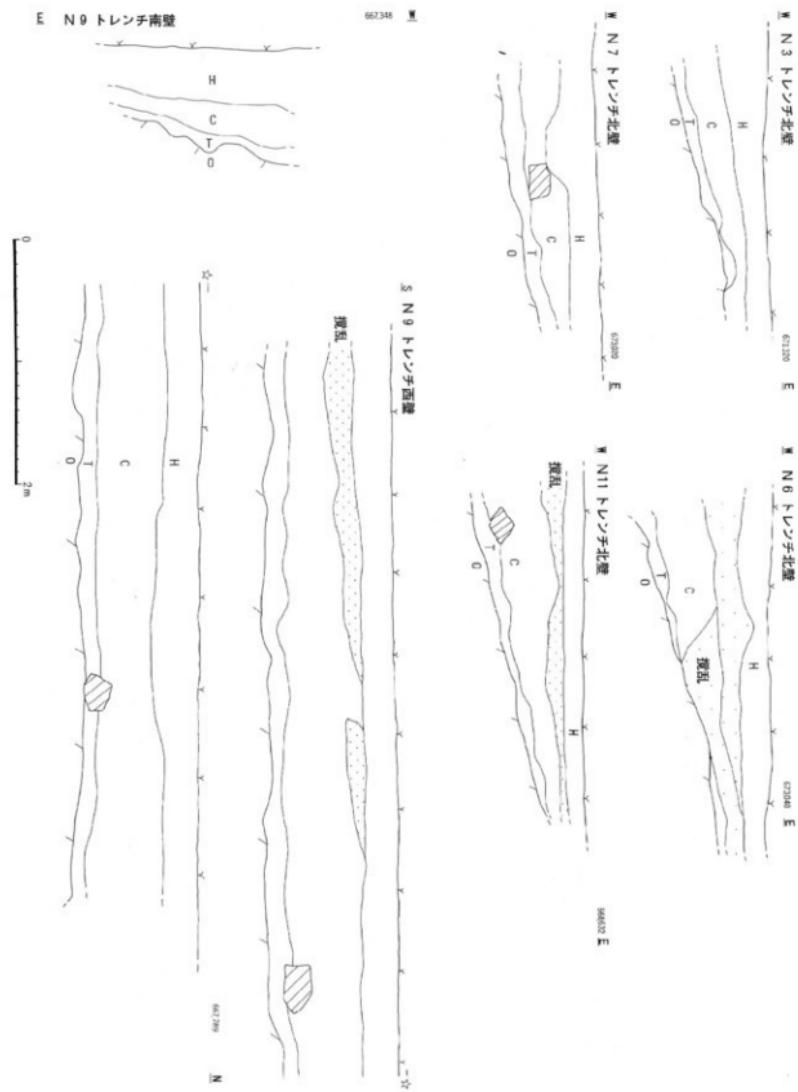
0
2m



第6図 断面図(3)

第7図 断面図(4)





第8図 断面図(5)

第1表 遺物統計表 (Kトレンチ群)

遺物	内 容	N1 トレンチ			N2 トレンチ			N3 トレンチ			N4 トレンチ			N5 トレンチ			N6 トレンチ			N7 トレンチ			N8 トレンチ			N9 トレンチ			N10 トレンチ				
		H	C	T	計	H	C	T	計	H	C	T	計	H	C	T	計	H	C	T	計	H	C	T	計	H	C	T	計	H	C	T	計
石	ナイフ形石器																																
石	刀 刃																																
石	磨 砕																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂																																
石	火打 火拂				</td																												

	遺物 内容	S1 トレンチ				S2 トレンチ				S3 トレンチ				S4 トレンチ				合 計
		H	C	T	計	H	C	T	計	H	C	T	計	H	C	T	計	
成 品	ナイフ形石器	1			1													1
	細石刃																	
	槍先形尖頭器																	
	角錐状石器		1		1													1
	有舌尖頭器																	
	搔 器		1		1													1
	削 器																	
	抉入搔・削器		1		1													1
	揉 錐 器																	
	彫 器																	
未 成 品	船底形石器																	
	ピック状石器																	
	礪 器																	
	叩 石																	
	押 庄 具																	
	使用痕ある剥片	3		1	4									2		2	6	
石 核	石 鐵													1		1	1	
	打製石斧																	
	土 器																	
	尖頭器		1		1													1
剥 片 ・ 削 片	丸のみ形石斧																	
	手斧形石斧																	
	翼状剥片核																	
剥 片 ・ 削 片	横長状剥片核	1			1													1
	縦長状剥片核					1			1									1
	不定形剥片核	1		2	3													3
	細石刃核		船底															
剥 片 ・ 削 片	翼状剥片														1		1	1
	横長状剥片					1			1	1				1	1		1	3
	縦長状剥片			1	1					1			1					2
	不定形剥片	48	6	20	74	8			8	16			16	39		39	137	
	不定形削片		2		2													2
	尖頭器剥片																	
	尖頭器削片																	
計		54	12	24	90	10			10	18			18	44		44	162	

第3表 遺物統計表 (Sトレンチ群)

第2章 出土遺物と接合資料

第1節 出土遺物

K・N・Sの各トレンチより出土した遺物は、10925点を数えるものの、遺跡の性格上、成品と認められるものは非常に少なく、製作過程に生ずる調整剥片、未成品の破損部分が圧倒的な数値を占めている。下記において第9図～第35図の119点の内容をトレンチ別に記述する。

[K6トレンチおよび拡張部]

尖頭器(1、2)ともに成品と推定した。1は、表面(左図)に大きな剥離面を残すが、完成の直前で先端部を欠損したものと推定される。2は2点が接合してほぼ完形となった資料である。裏面(右図)では横位の大きな剥離面が観察されるも、側縁部での細かな押圧剥離を施した、最終調整面をみせている。いわゆる槍先形尖頭器の典型的な例である。

有舌尖頭器(4)先端部と基部を欠損しているが、側面の張り出し状態から、長さ100mm前後の形状(破線)が推定される。表面(左図)では、側面からの押圧による極状剥離が顕著で、本石器の特徴を示している。

尖頭器未成品(3、5～12、14、15)3は、横長の扁平な剥片を素材として、主に主剥離面側からの成形途中、先端部分が折れた状況を示す。折れ面での再剥離はみられず、接合した結果は三日月形の変則的な形状を呈するが、先端部での加工が先行している点に注目しておきたい。

5は、先端部分で、全長の約1/3と推定できる。側面からの荒い打ち欠きによる成形から、細かな整形の段階に移行した状況を示している。7も同様の段階とみられる基部である。6、8は、荒い成形段階の基部で、8の表面(左図)では広い表皮面(節理面)を残している。9は、その段階の中間部分と推定される。

10は、2点が接合した資料である。打ち欠きによる荒い成形段階で、先端部が折れて放棄した典型的な資料である。主に裏面(右図)からの剥離により、木の葉状に成形しようとする意図が明瞭である。なお、11の尖頭器剥片が接合している。12は、横長の剥片を素材とし、主剥離面からの成形段階で折れた例である。基部から先端部へとの剥離作業中のアクシデントと考えられる。14、15は、ほぼ三角形で板状の剥片を素材とし、尖頭器成形の初段階とみられる資料である。いずれも表皮および節理面を多く残している。14は、三点が接合しているが、先端部分の成形を意識的に先行させている。次に15は、2点が接合し大まかなプロボーションを成形した段階で折れたものである。これには16～20の剥片5点が接合し、それは素材自体の軟弱な部分を剥離した資料とみられるが、20ではすでに、側面からの調整痕(左図)が観察されている。初段階剥離の興味深い資料である。

船底形石器(13)板状の素材をたち割るようにして作出した平坦部を打面とし、縦方向の剥離痕をみせる。細石刃核のプランクである可能性がつよい。以上の石器類は全て下呂石製である。

叩石(21～42、44)合計23点出土しているが、5点多孔質な紫蘇輝石安山岩、他は地元産出の流紋岩で、いずれも河原石である。重さ170g～1360gまで大小みられるものの、200～400gが主体的な数値を占めている。いわゆるハンマーストーンとして片手で打ちおろすタイプで、主に扁平で梢円形のものが選ばれている。基本的には長軸両端に打痕を見るものが主体をなす。なお、側縁の2/3以上打痕が廻る25、33、37、41、42、44などは、やや大型な傾向をみせる。また、平坦面にも打痕が集中する23、31、34については、尖頭器成形時の加工、すなわち尖頭器剥片との関係で理解されよう。

押圧具(43)角柱状の下呂石の下端部角面を利用した押圧具の一例と推測する。いわゆる刃つぶし的用途が考えられ、圓面矢印で表した周縁部にその痕跡が観察される。

縄文式土器片(48)細かな縄文を斜位に回転し、その上をW字状を呈するヘラ状工具で横引した太い沈線文が施されている。胎土は淡褐色を呈し、その粒子は細かい。底部にちかい部分の破片と思われ、丸底の可能性がたかい。以上がK6トレンチおよび拡張部の遺物集中部、淡褐色層(T層)出土の遺物の主だったものである。

翼状剥片核 (46) 打面調整ののち、若干斜位方向から翼状剥片が剥離された痕跡をみせる。裏面（右図）は表皮面と推測され、剥離作業の最終的な資料であろう。黒色土層（C層）から出土した。

石鐵 (47) やや外反気味の逆刺をみせ、いわゆる鎌形鐵であろう。表土（H層）出土。

打製石斧 (45) 短冊形を呈し、直線的な側面感をみる。表面には表皮面を残し、側縁部の剥離は入念に施されている。なお、同図Bにみるように、下端部から破線で明示した範囲と平坦部分には、使用による磨滅痕が光沢をみせるほど顕著に残る。黒色土層（C層）から出土。砂岩製である。

【K7、13~18、20トレント】

尖頭器 (61) 先端部がやや曲がって成形されているものの、押圧剥離による調整がみられ、側面（左図）での直線的な仕上り状態から成品とみなした。推定長90mmは、若干小振りな例であろう。

尖頭器未成品と尖頭器剥片 (49~53、55~60、63) ここで記述する未成品は、大まかに二段階の成形過程に分けられよう。まず第1に、49や57のように裏面（右図）に比較的大きな剥離面を残す例である。57での尖頭器剥片（58）接合資料で判るように、本体と破片の大きさからみて叩石によったかなりラフな打ち欠きの段階と推測される。いずれも側面感では大きなジグザグ状態がみられるのがこの段階での特徴であろう。

次に、器の大小を問わず、表裏両面からの打ち欠きによる成形が入念となるも、まだ側縁からの細かな押圧剥離痕が認められない段階である（50~53、55、56、60）。これらは主にその側面感の曲り、ジグザグ状態、そして器厚などのバランスから判別されよう。なお、59の場合、その形状的観点から、有舌尖頭器の未成品である可能性がつよい。

角錐状石器未成品 (63) 縦長の大きな剥片を素材とし、裏面からの剥離段階で、器厚（厚さ）の調整剥離が不可能とみて放棄したものと推測したが、すでに尖頭部分の成形が入念である点に注目しておきたい。

叩石 (62) 扁平な楕円形の河原石を使用した典型的な例で、側縁部のほぼ全周に打痕が観察される。なお、本遺跡では唯一の砂岩製である。

翼状剥片 (64) 打面調整（側面図）に若干の不明瞭さをみせるが、いわゆる瀬戸内技法の所産である。推定長80mmと普遍的なサイズである。初矢遺跡で表採されている資料に類似している。

ナイフ形石器 (65) 横長剥片を素材とし、両側縁のプランティングによる基部調整が明瞭で、64と同様、瀬戸内技法によるものであり、国府型ナイフ形石器である。

石鐵 (66~69) 三角鐵66の先端部分には、両側縁からの造り出しがみられる。69は、いわゆる鎌形鐵である。これらは、繩文時代早期の押型文系に多く見出される。

船底形細石刃核 (71) 両面加工による木ノ葉状の尖頭器様の扁平なブランクを側面から割り出して、平坦な打面を作出する技法、いわゆる湧別型細石刃核（湧別技法）の好資料である。細石刃作出面は、図中央の側面にあたり、4条までが観察できる。打面との角度は90度ちかくになり、また階段状の剥離痕がみられることから、作業を中止したものと推測される。なお、甲板（打面）での磨り痕は認められない。

側面調整剥片 (70) 上記の船底形細石刃核71と石材が同定されることからも、同石器のいわゆるクレスティッドフレークと呼ばれる調整剥片と認定した。細かな剥離状態は、71の側縁両面加工に酷似している。

【N8トレント】

尖頭器未成品 (72~75、77、78) 72は、現存長95mm、幅53mmを計る大形品である。打ち欠きによる細部調整剥離と、一部分で押圧剥離が開始された段階である。しかし、側面でのジグザグ感は目立っており、成品一步手前の資料であろう。74では、側縁部での細部調整途中といった段階と考えられる。やや弓曲りの側面感と、その器厚などから、丸のみ形石斧の未成品の可能性もありえよう。73は、縦長剥片を素材とし、先端部から側縁の一部に調整剥離痕がみられるものの、その器薄な点と、長軸の曲りの強いことなどから加工を中止したものと推測される。なお、75についても同様の要素が認められる。

77、78は表皮面を大きく残し、打ち欠きによる大まかな成形の段階であるが、77では全体のプロポーションがすでに槍先形をつよくイメージしている状況が興味深い。

搔器 (76、80) 76、80は、先刃搔器で、縦長剥片を素材とし、76では側下端から基部に、80は側縁片面に着柄のためと思われる刃つぶし痕が観察される。

抉入搔器 (81) 縦長剥片の先端部に、浅いU字状の刃部を成形した石器である。

削器 (79) 縦長剥片の片側に刃部を成形し、基部が欠損している。

手斧形石斧未成品 (82、83) いずれも縦長な台形を呈し、各側縁部からの剥離によって成形され、下端部はうすく加工し、刃部を強く意図したものと推測される。

彫器 (84) やや不定形の剥片の先端部を、裏面から横位に角度のある調整剥離を施したち、垂直に彫刀面を作出している。いわゆる角形彫器である。

石刃核と剥片 (85~88) 85は、ほぼ円錐形を呈する石刃核で、やや内反する打面から連続して作出する石刃技法（接合資料D）が看取される。真正な石刃は見出せないものの、空間部分にそれが推定できよう。なお86は、打面角度再生のための剥片である。

石刃核と剥片 (89~92) 91の石刃核の表裏面に表皮・節理面がみられ、素材が板状を呈するものと確認できる。板状素材の両側端部に、両面からの刃つぶし的な調整剥離を施したち、剥離作業を開始する。90がそれに該当し、側面調整剥片（クレステッドフレーク）である。また、89、92などの剥片も接合して資料Eとなった。上記の資料Dと同様、石刃技法である。

石刃核 (93) 縦長の石刃を作出した石核で、現存する打面は、鋭角で、上下の打面転移が観察される。

打面調整剥片 (94、95) 94は、角柱状の石刃核の打面を横位にカットして、打面を再生したポジティブな剥片である。左下図に旧剥離のネガティブ面が観察される。95は、打面角度再生のための剥片で、縦長な旧剥離痕は整然としている。このように打面調整は、二種類の方法がとられているようである。

側面調整剥片 (96) 縦長の石刃を作出するに先だって施す大切な作業である。これは特に、板状素材を利用した石核に多くみられる。96下半部の調整痕は入念で、上からの打撃力が下にのびやすくしたものと推測される。

石刃 (97~104) いわゆる真正な石刃と呼ばれ、細かな打面調整がみられ、器薄である。表面（左図）に二条の稜をもつものが多い。裏面（右図）の主剥離面では、リングが垂直にのびるものが多い。また、側面感では内曲が少ない。99、100、102~104などでは、細かな使用痕が観察されている。

細石刃核 (105) 細長い角柱状の体部で、打面は小さい。七~八条の細石刃剥離痕が残り、幅7mm前後である。なお、下端部には極く細かなつぶれ痕が観察される。

細石刃 (106~109) 表面（左図）に二条以上の稜をもち、幅9mm前後である。

船底形細石刃核 (110) 湾曲のつよい打面で、プラン短軸の一辺に、三条の細石刃剥離痕をみる。体部の調整痕は少なく、下端の一部分につぶれ痕が観察される。

[N4、7、9トレンチ]

手斧形石斧未成品 (111) 横剥ぎ剥片を素材とし、縦長の台形を呈する。上部と片側縁部の急角度な調整剥離による成形の途中である。82、83と同様に下部に薄い刃部を意図している。

彫器 (112、113、115) 112は石刃状剥片の先端に、横位から一条のファシットを入れ、矢印部分に彫刀面を作出している。113は、石刃状剥片の上部を斜位に切断し、裏面に一条の垂直なファシットを入れている。115は、やや不規則な縦長剥片を素材とし、113と同様、裏面側にファシットを入れ、先端部を彫刀面としている。なお、両側縁部には、刃つぶし状の調整剥離が施され、にぎりを意識している。

丸のみ形石斧未成品 (114) 短冊状を呈し、高めな台形の断面形状をみせる。短軸両端部は、横位と縦位からの調整により成形している。なお、裏面下端（右図）での二条の剥離は、主剥離面の打瘤痕を取り去る目的と推測されるが、ややとりすぎの感があり、刃部としての欠陥が否めない。したがって加工途中であきらめた可能性がつよい。

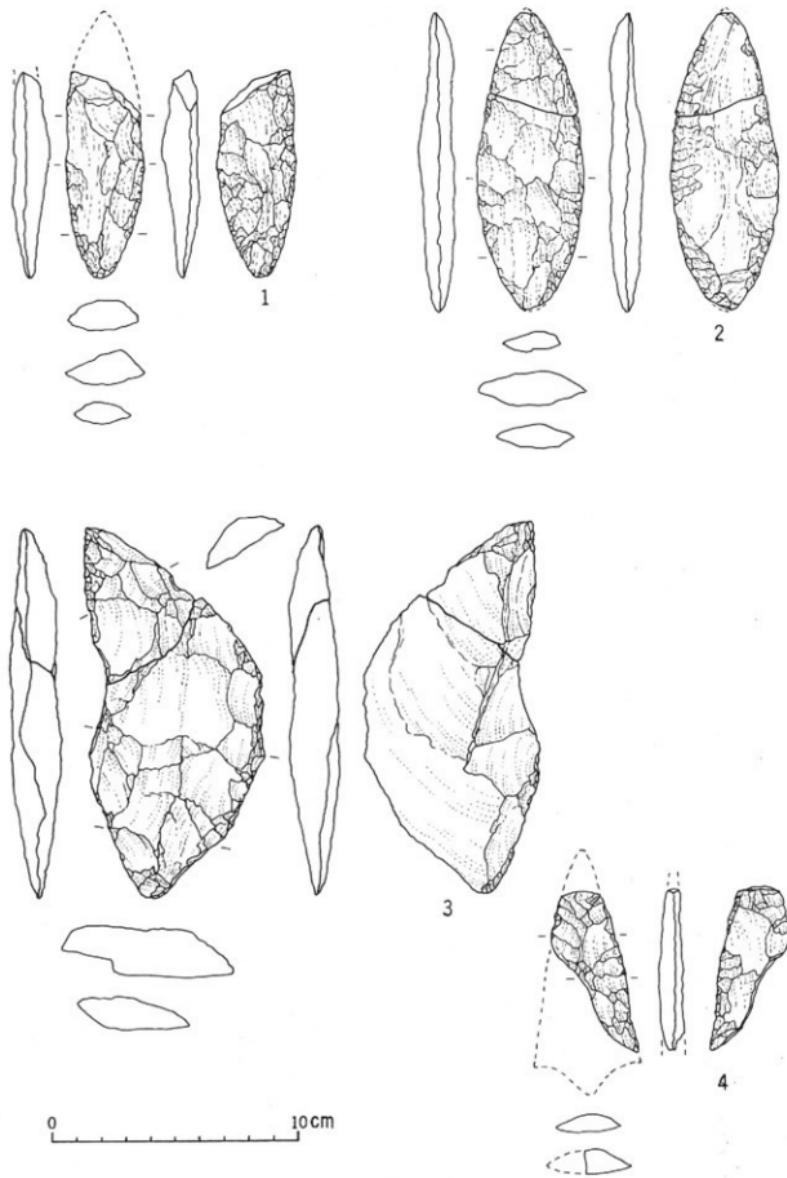
尖頭器未成品 (116) 縦長剥片を素材とし、主に裏面からの剥離を行っている。特に先端部は入念であるが、側面感の曲りがつよい。

[Sトレーナ]

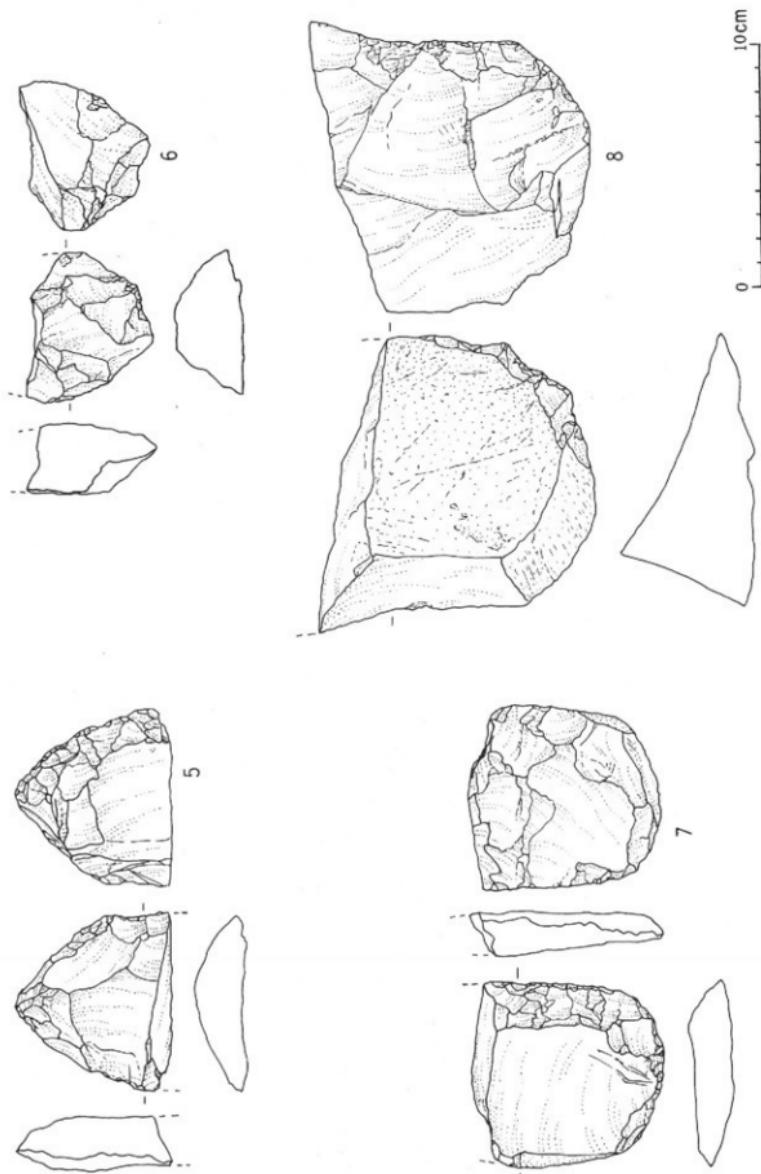
尖頭器未成品（117）丸みをもって成形された基部である。表面には大きな剥離痕が残るもの、その側面でのジグザグ感が少なく、成形の最終段階にちかいものと推定する。

角錐状石器（118）曲りの少ない縦長剥片を素材とし、正三角形にちかい断面感をみる。細かな剥離痕が先端部にみられて、成品の可能性がたかい。

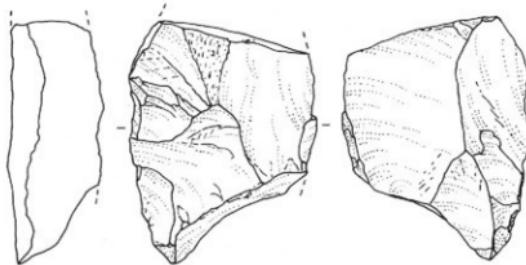
ナイフ形石器（119）大形の縦長剥片を素材とした、ナイフ形石器の破片である。右側縁部（左図）に急角度のプランディングが施され、一部裏面にまでおよんでいる。初矢遺跡の表採資料に類似品が見出せる。



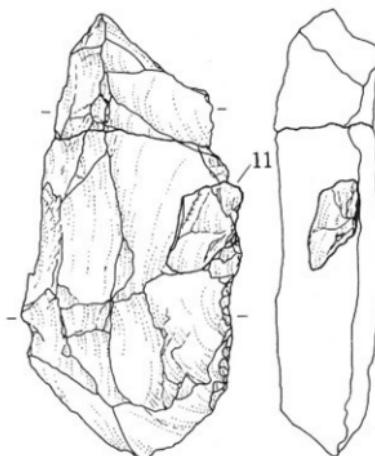
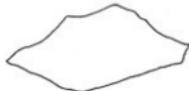
第9図 遺物実測図 (K 6)



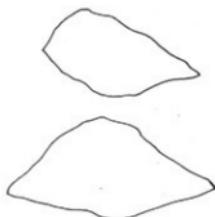
第10図 遺物実測図 (K 6)



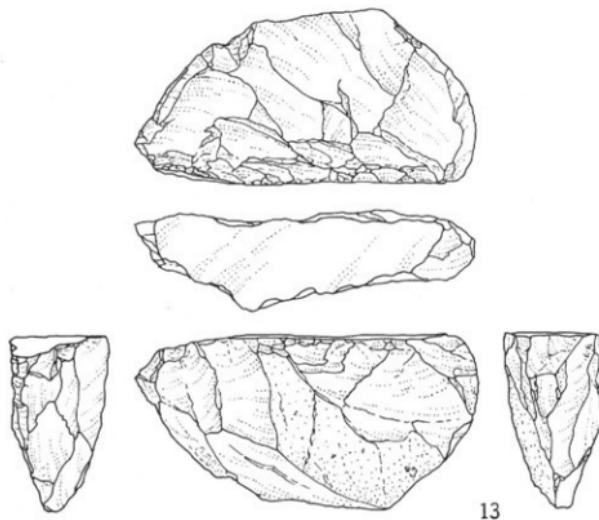
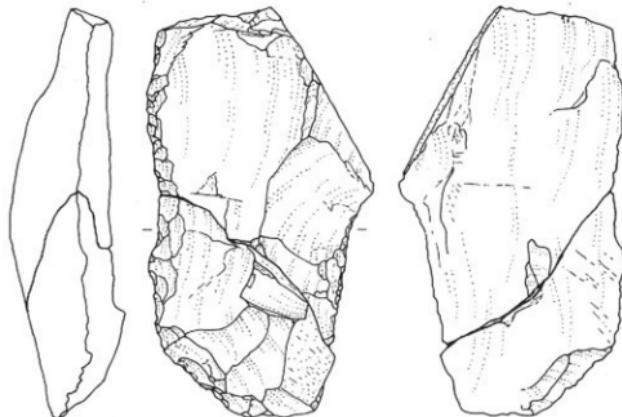
9



10

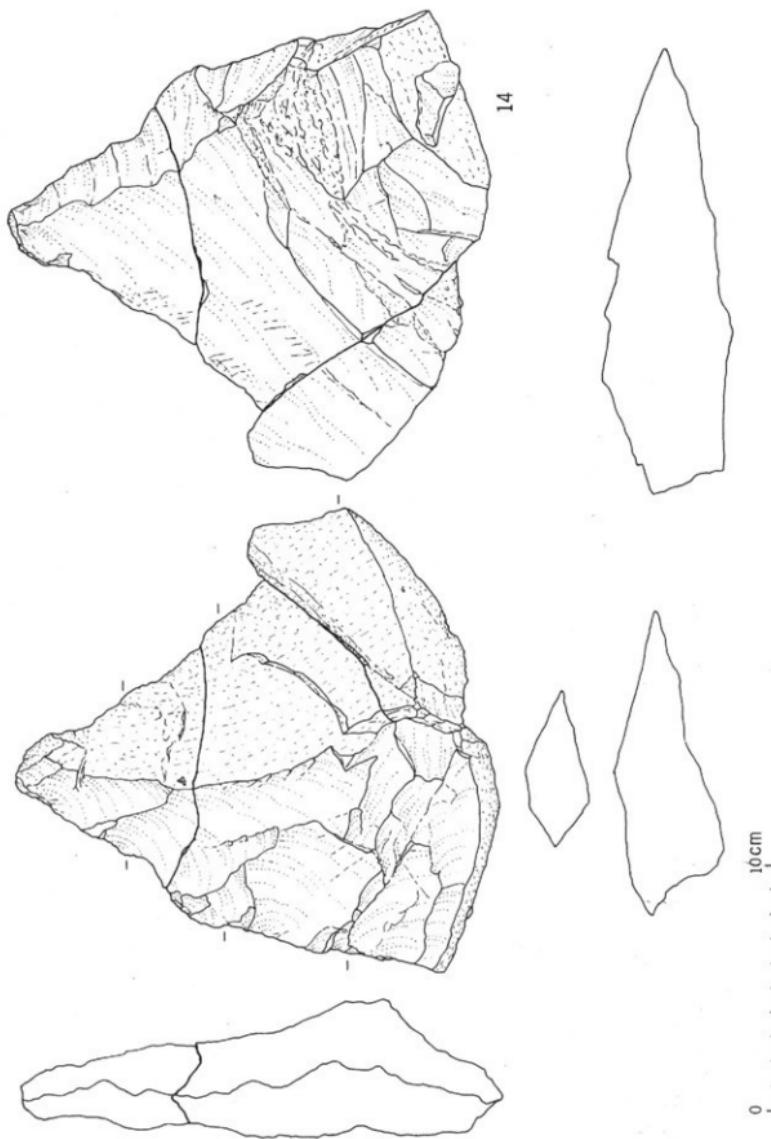


第11図 遺物実測図 (K 6)

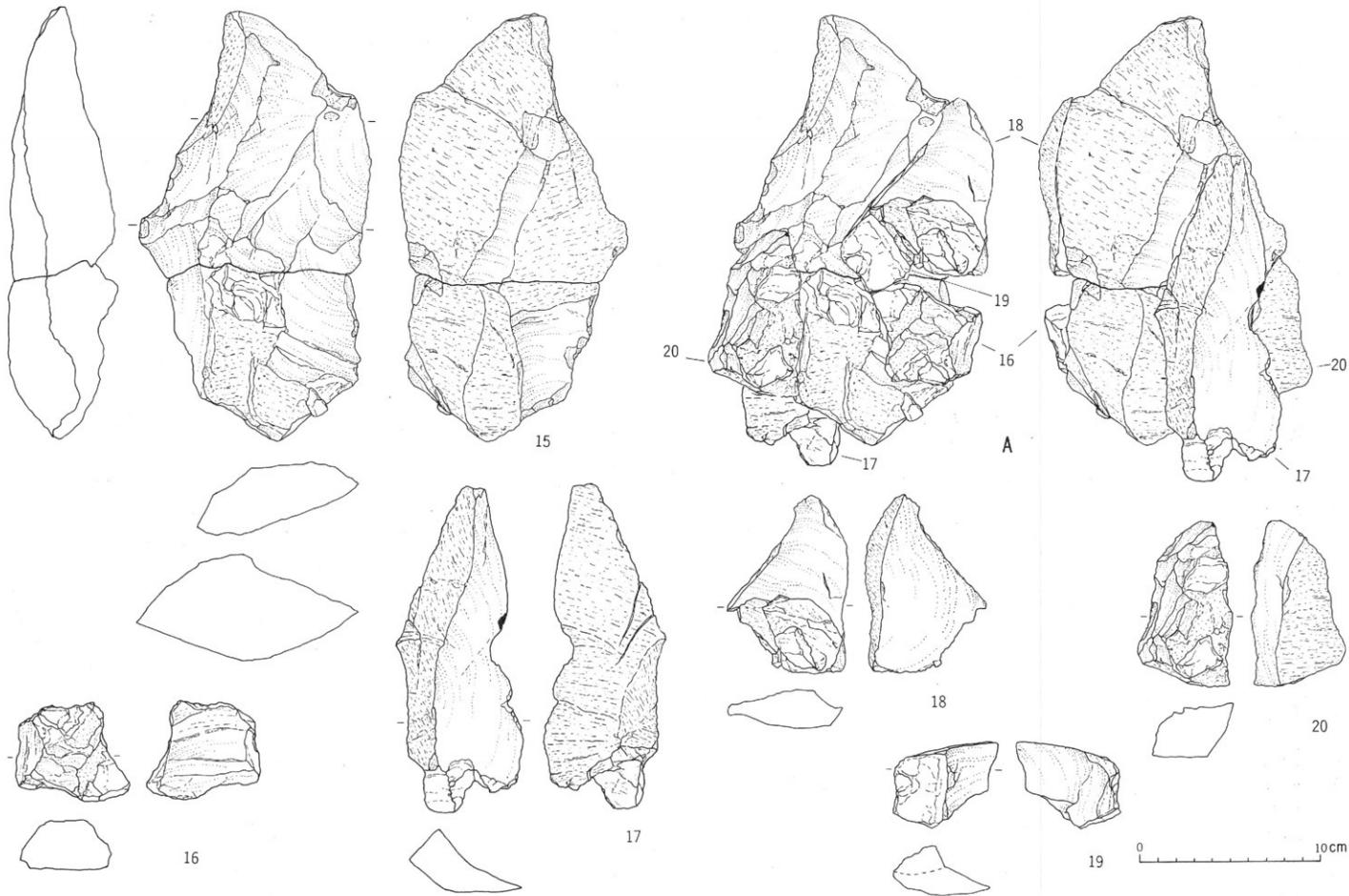


0 10 cm

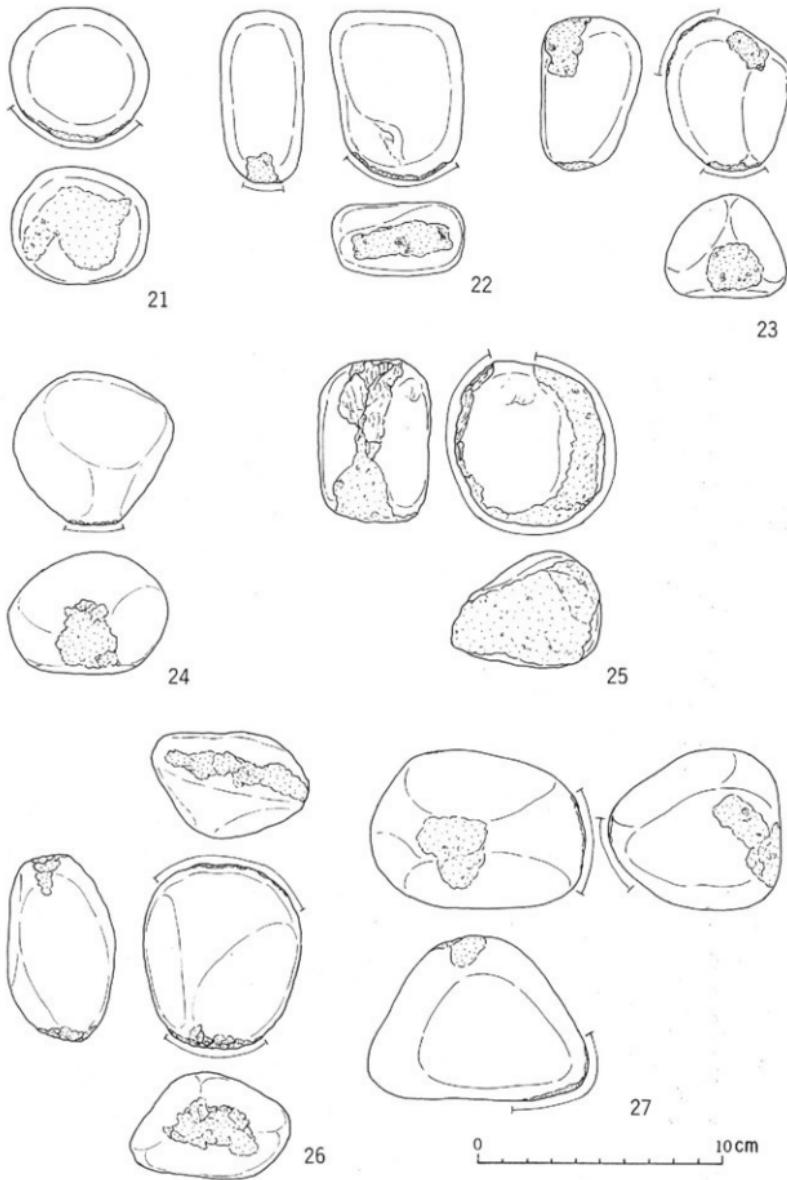
第12図 遺物実測図 (K 6)



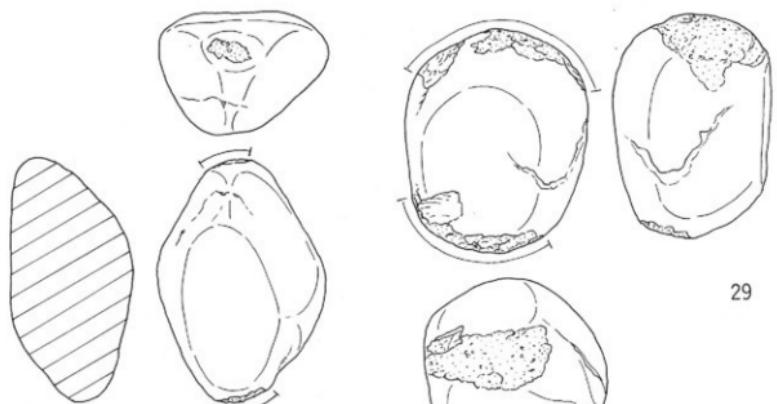
第13図 遺物実測図 (K 6)



第14図 遺物実測図 (K 6)

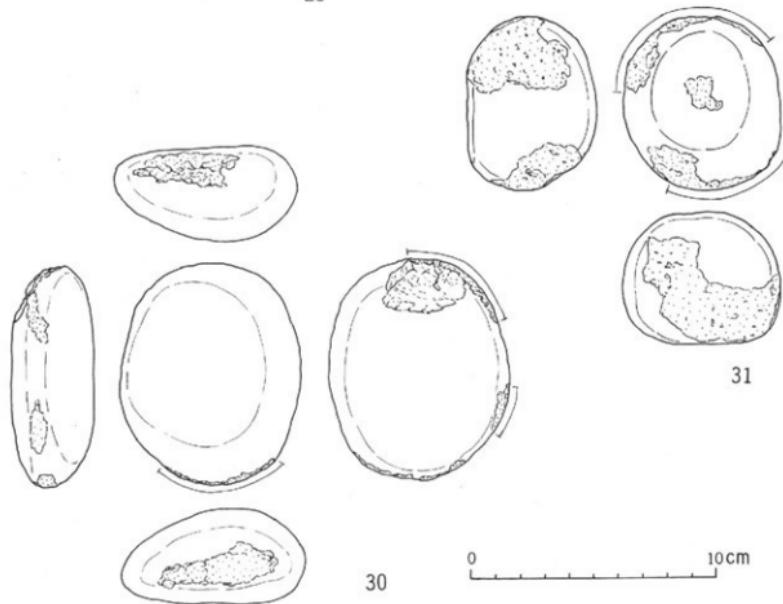


第15図 遺物実測図 (K 6)



28

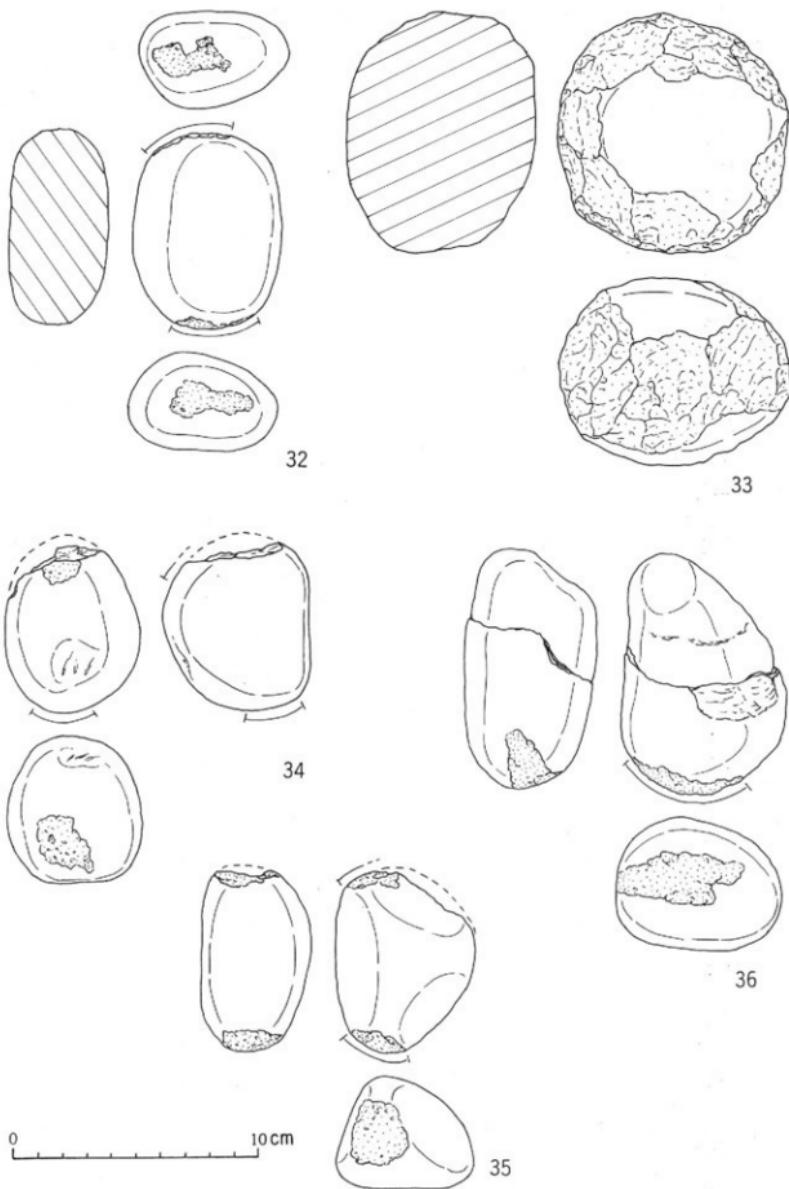
29



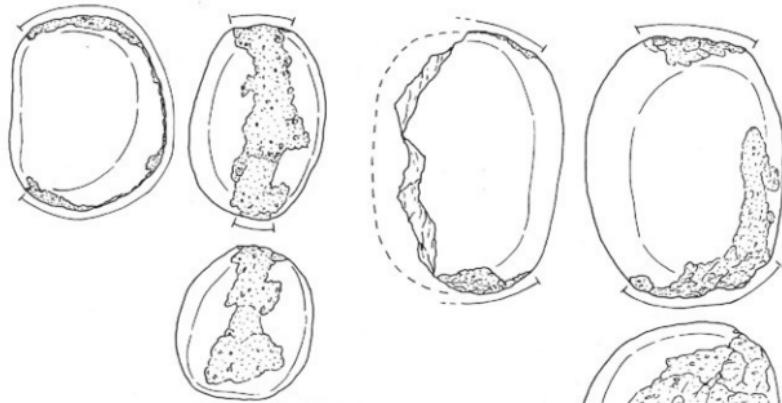
30

0 10cm

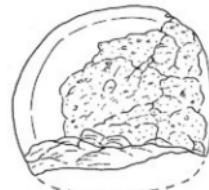
第16図 遺物実測図 (K 6)



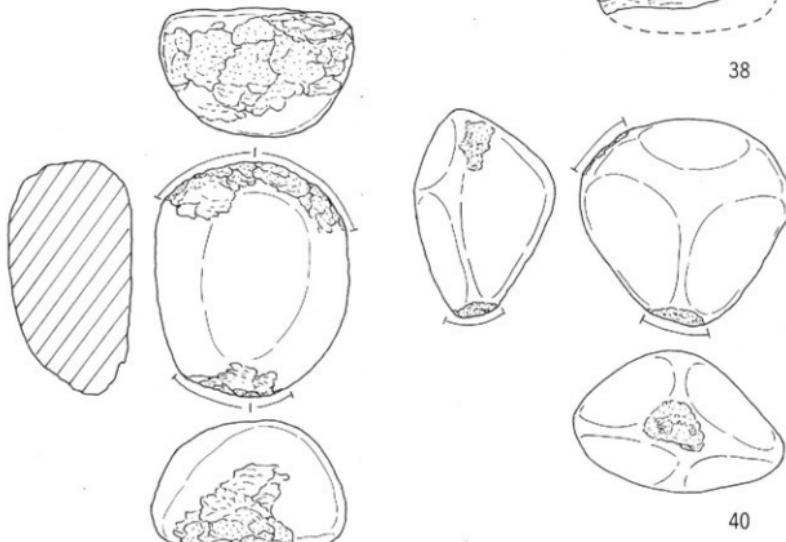
第17図 遺物実測図 (K 6)



37



38



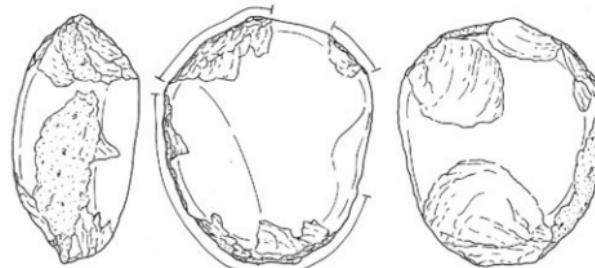
39



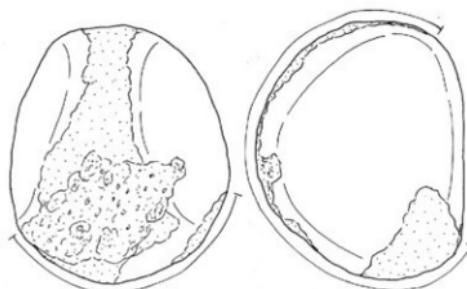
40

0 10 cm

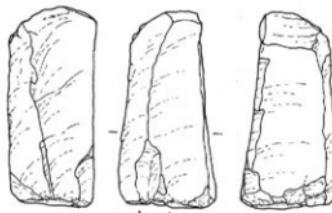
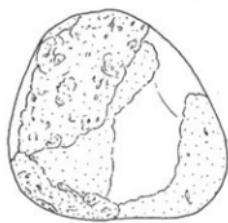
第18図 遺物実測図 (K 6)



41



42

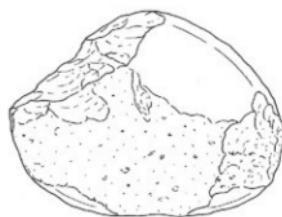
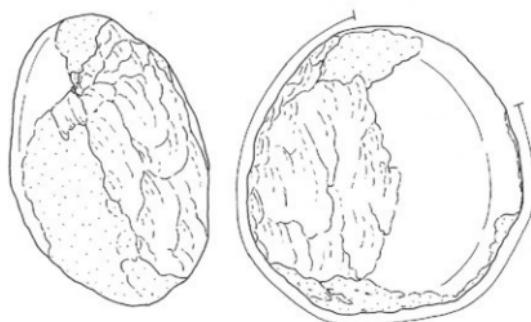


43

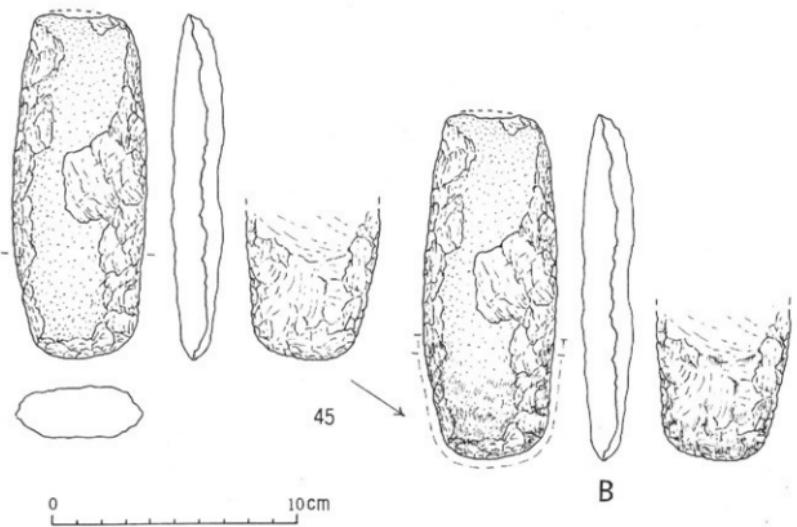


0 10cm

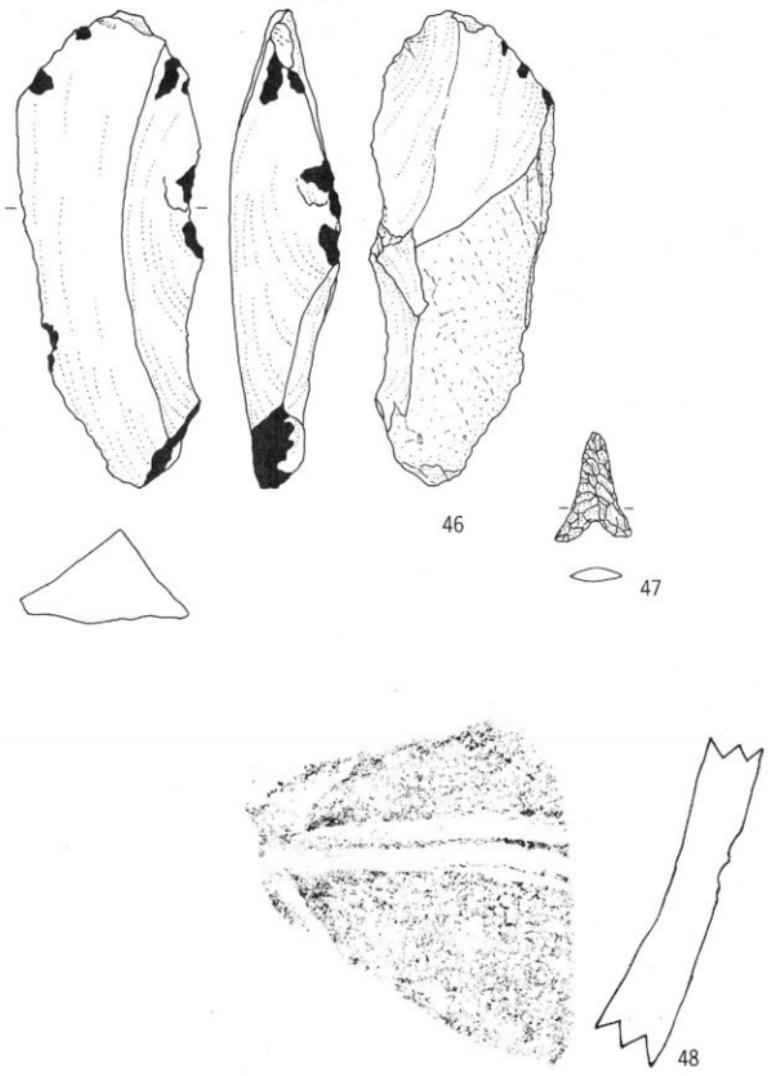
第19図 遺物実測図 (K 6)



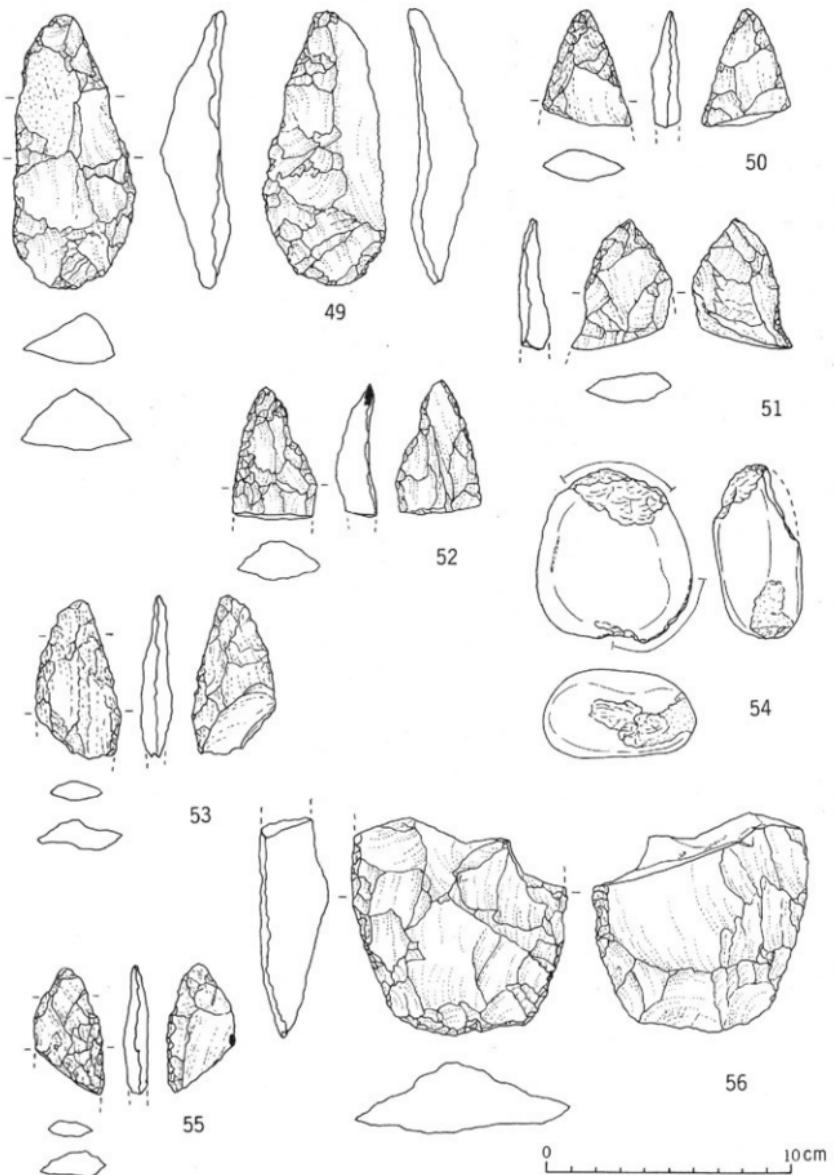
44



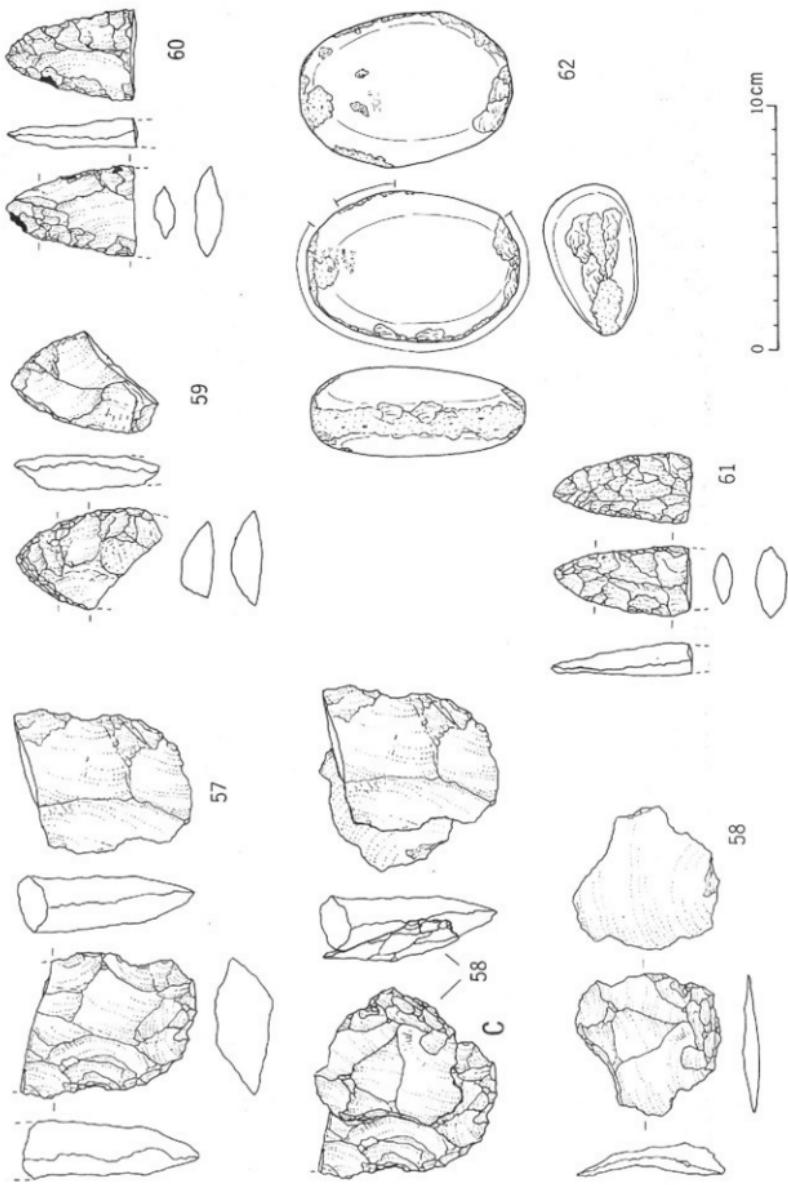
第20図 遺物実測図 (K 6)



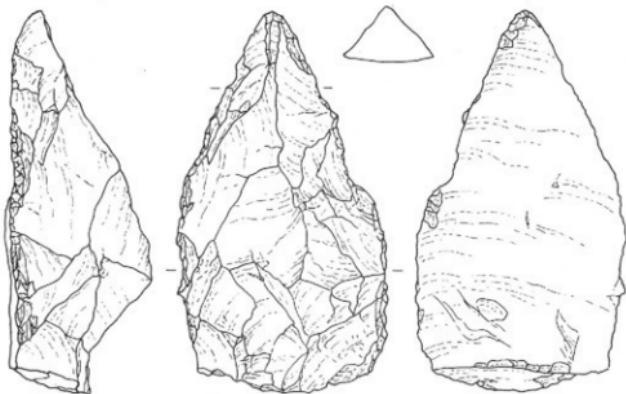
第21図 遺物実測図 (K 6)



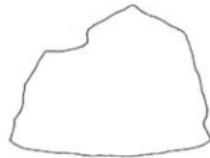
第22図 遺物実測図 (K14~16)



第23図 遺物実測図 (K 16~18)

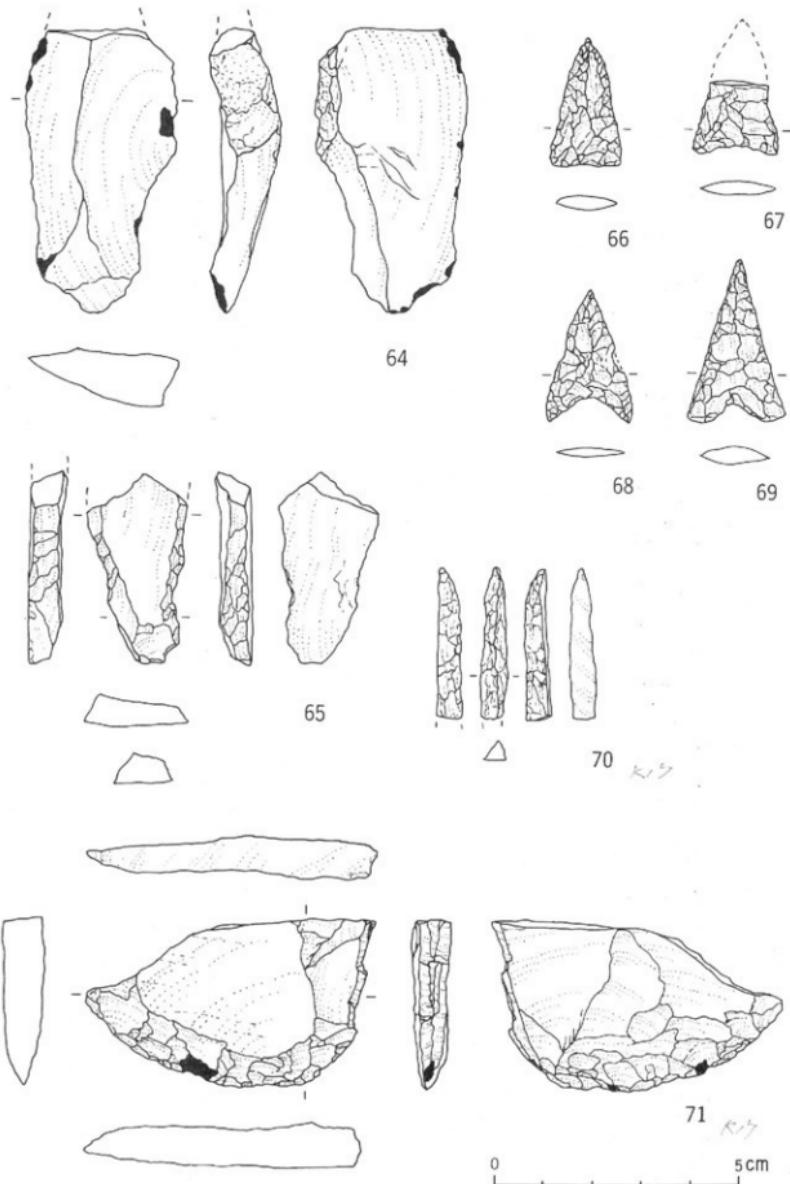


63

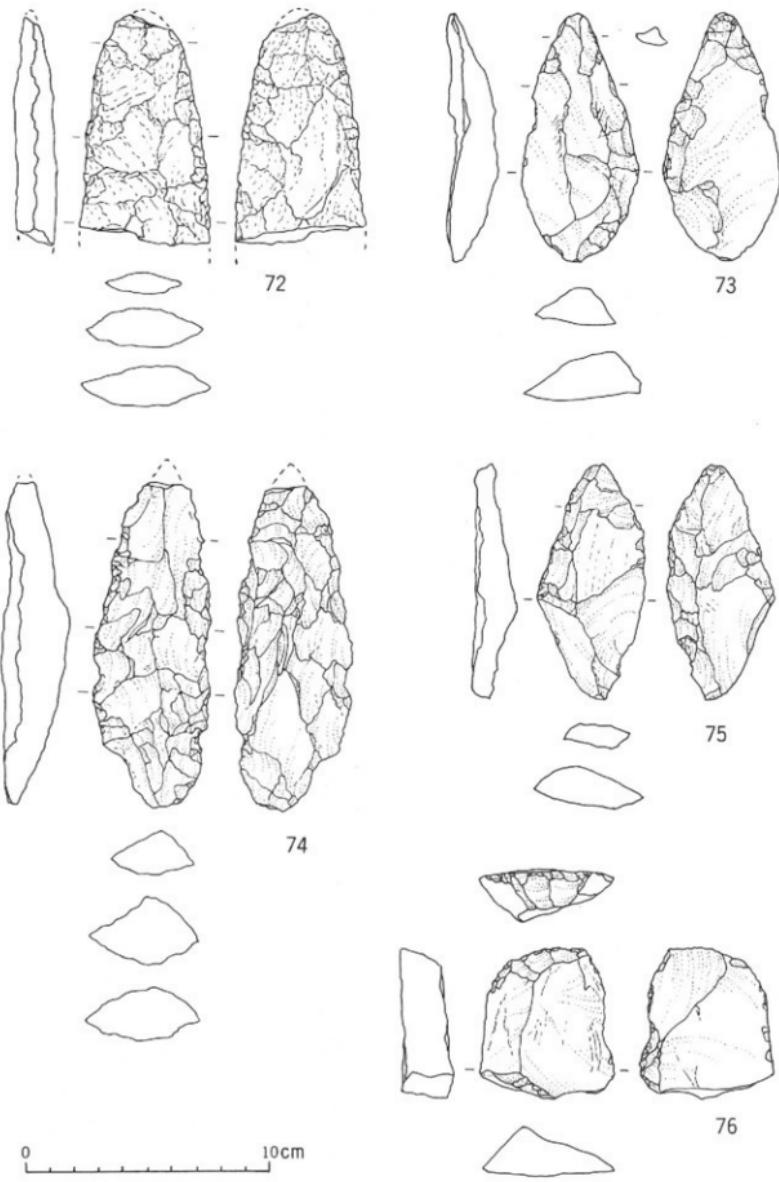


0 10cm

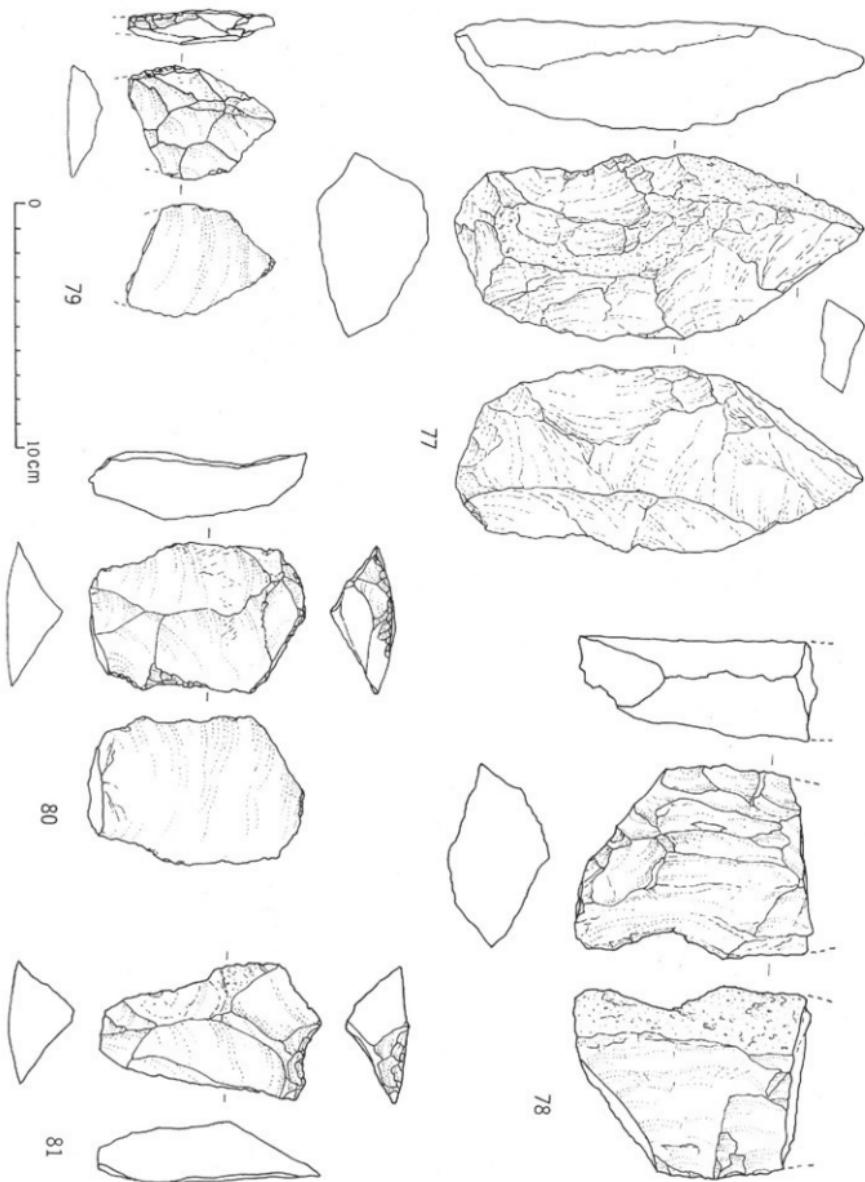
第24図 遺物実測図 (K18)



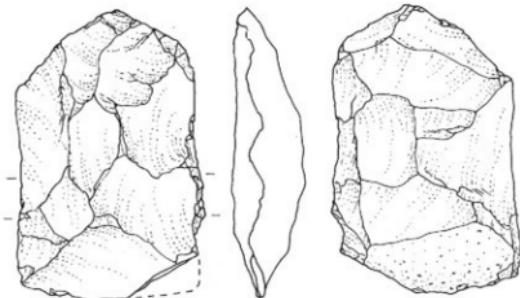
第25図 遺物実測図 (K7,13~17,20)



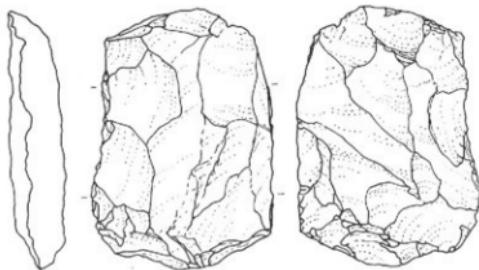
第26図 遺物実測図 (N 8)



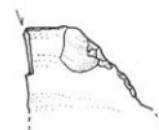
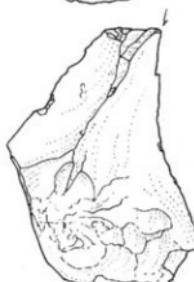
第27図 遺物実測図 (N 8)



82



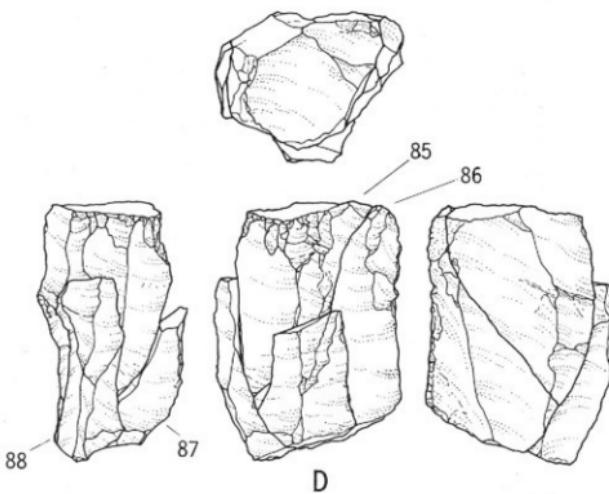
83



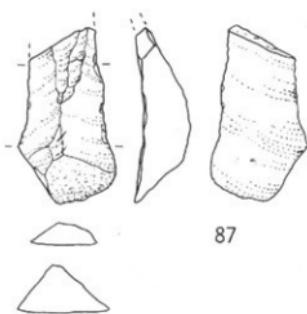
84



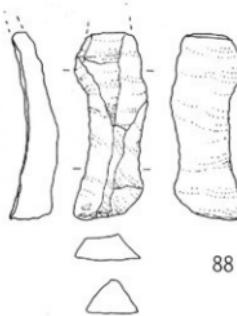
第28図 遺物実測図 (N 8)



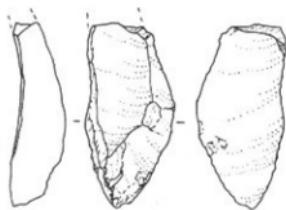
D



87



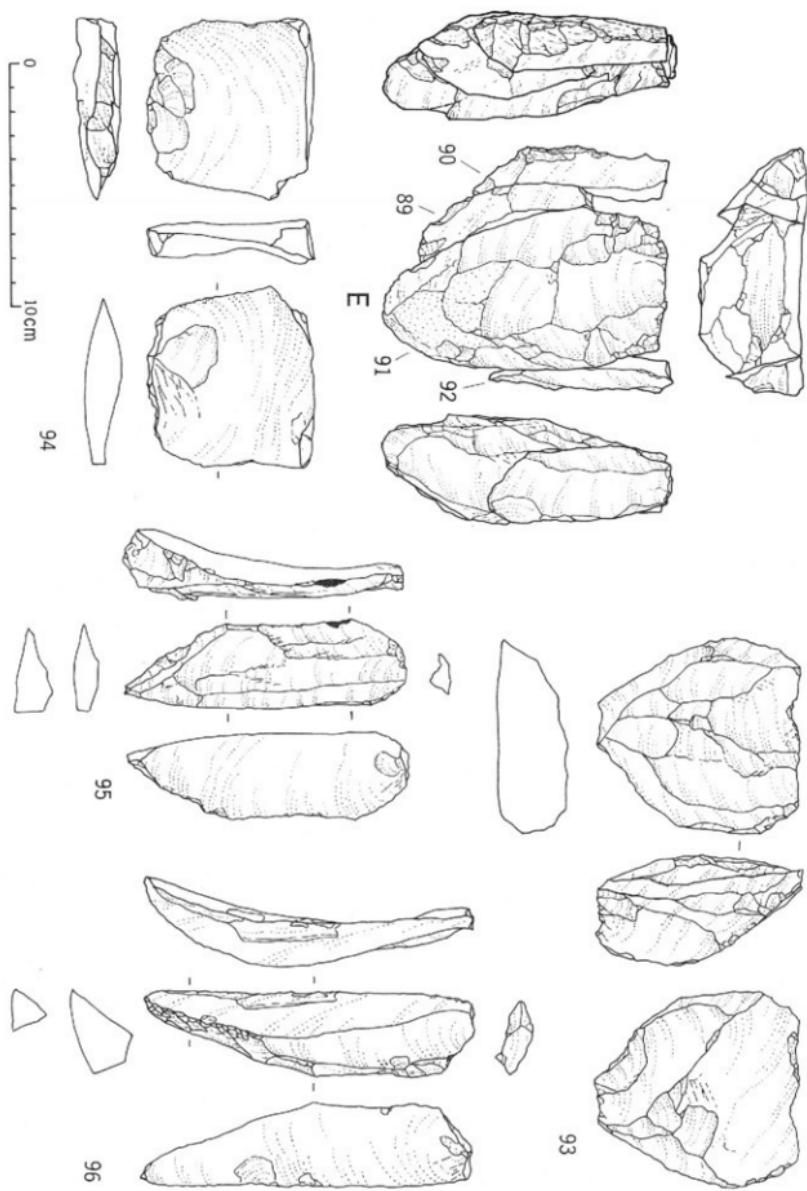
88



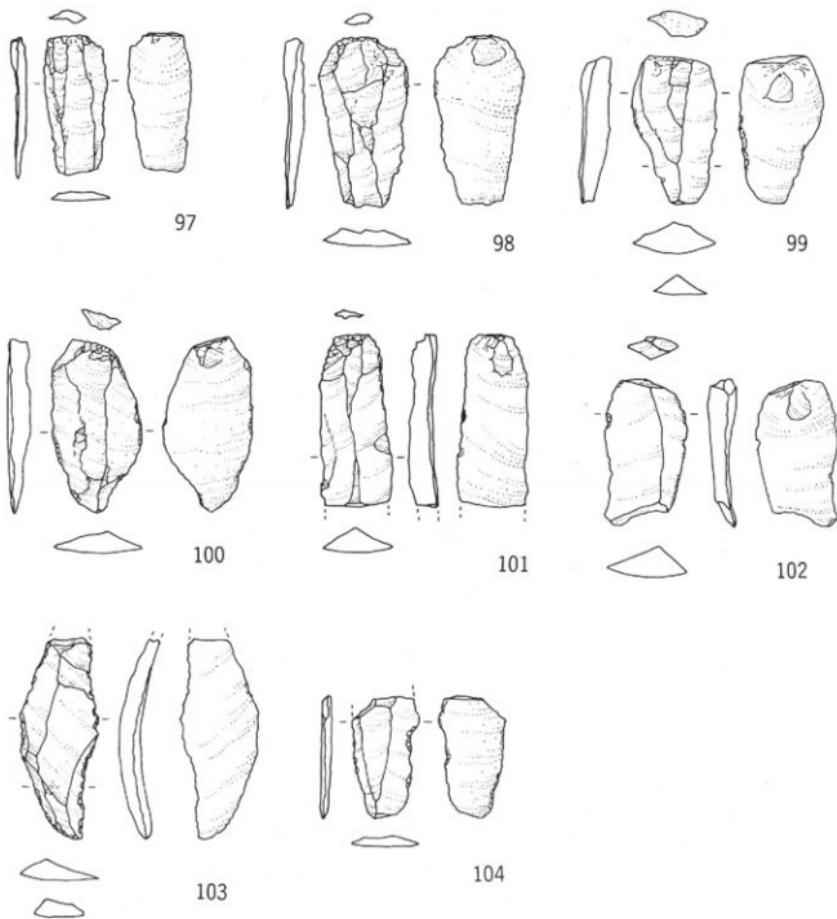
89

0 10 cm

第29図 遺物実測図 (N 8)

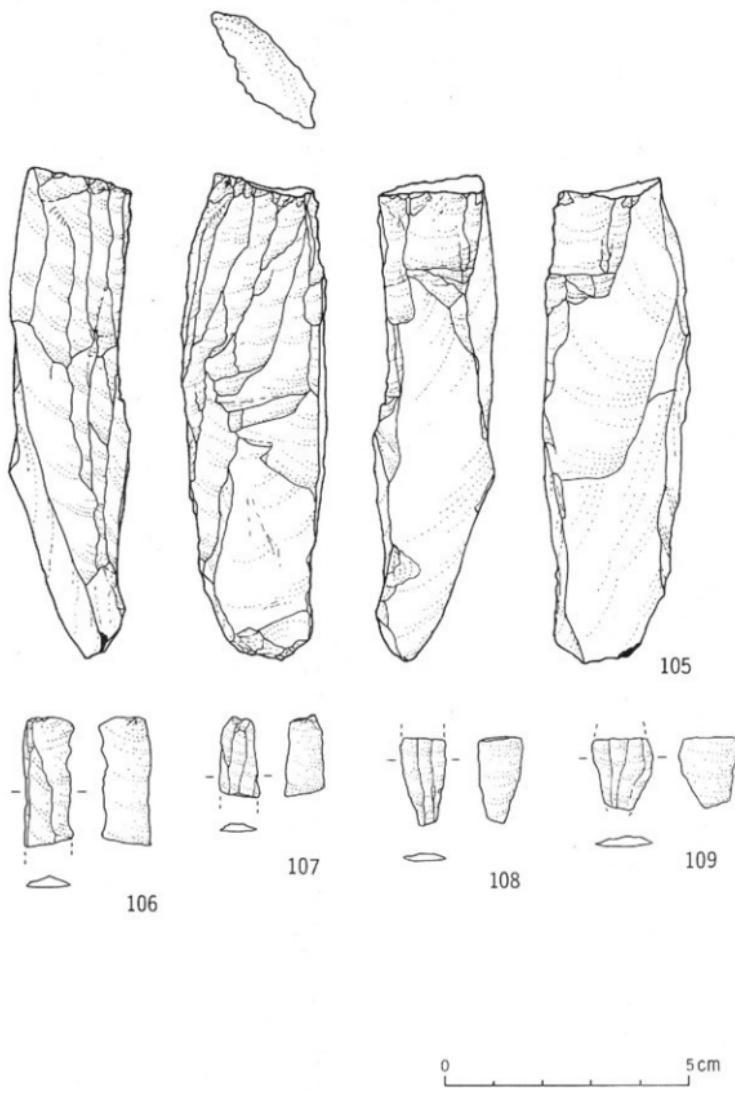


第30図 遺物実測図 (N 8)



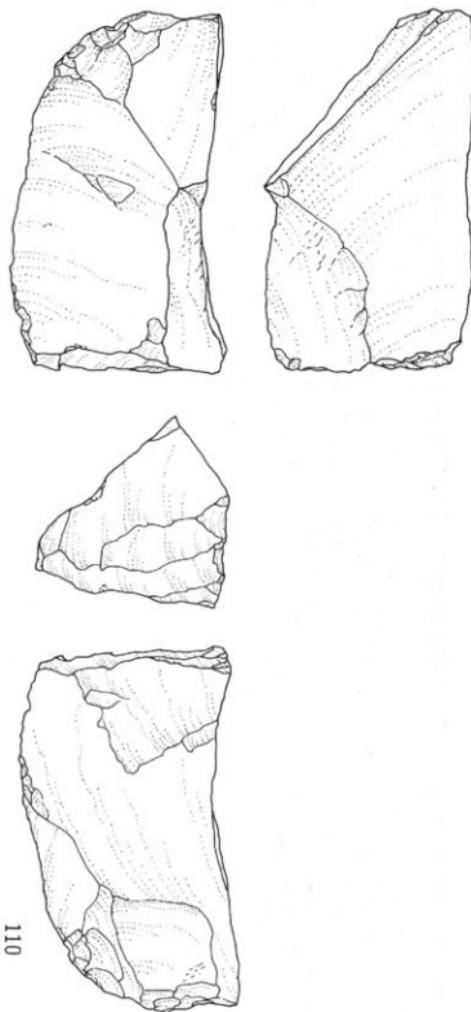
0 10 CM

第31図 遺物実測図 (N 8)

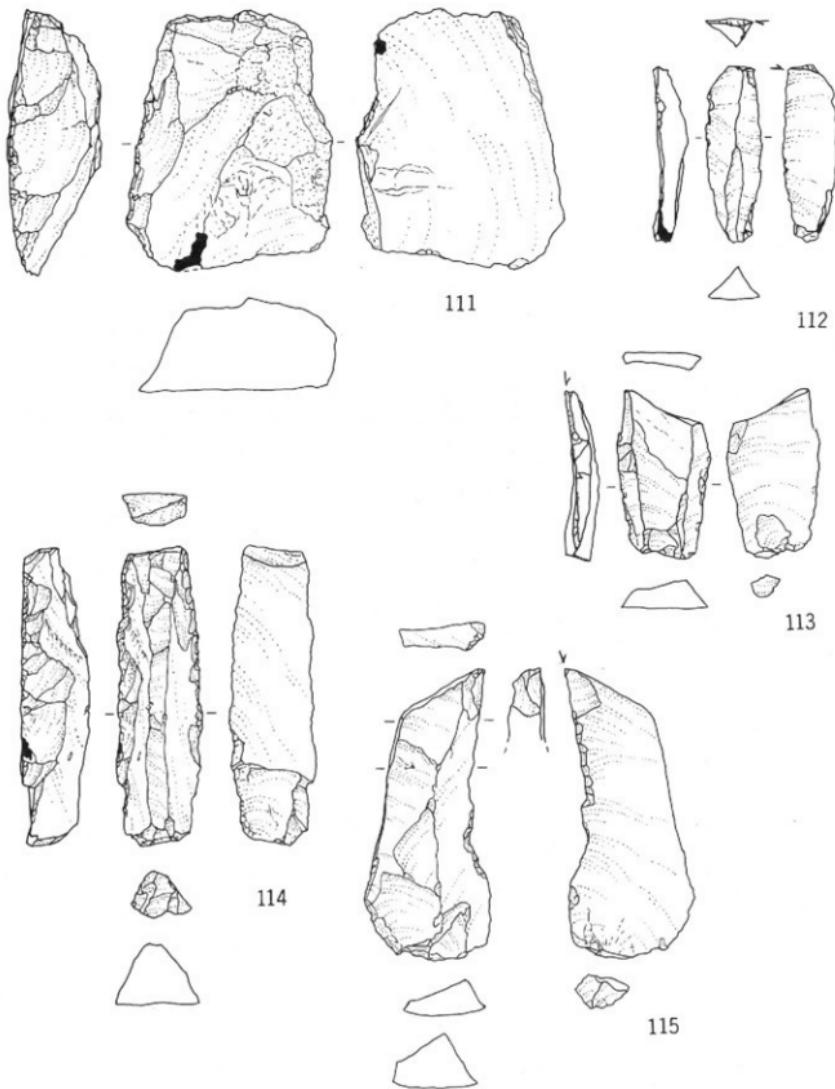


第32図 遺物実測図 (N 8)

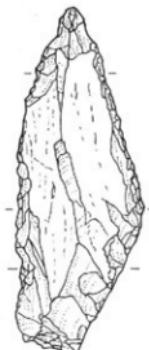
0
5cm



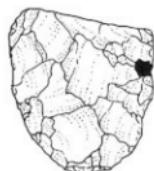
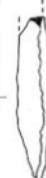
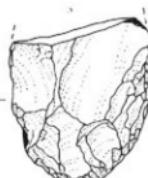
第33図 遺物実測図 (N 8)



第34図 遺物実測図 (N4, 7)



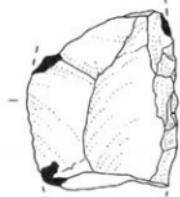
116



117



118



119



第35図 遺物実測図 (N9, S1)

第2節 遺物集中部の分布と接合

1、K6トレンチと拡張部（別添第1、2図） K6トレンチの遺物集中部は、別添第1図で示したように、北へ2m²、南へ23m²ほど拡張したことによってその全貌が明らかとなった。まずA3区からH1区に向って、2m前後の幅をもって広がる「第1ユニット」が印象的である。石器群は、大形の不定形剥片が多く含むA群（A3区～D2区）と、比較的小形の剥片を主体とする下方（E2区～H1区）のB群に分けられる。さらにD4区からG4区にかけての、やや密度のうすい一群（C群）を加えると、全体的には末広がりの分布状況を呈する。

それとは別に、C5区から西壁寄りにH5区までの「第2ユニット」が存在する。ところが、拡張部西壁付近は、上部からの旧水田面構築時にともなう擾乱部分があり、資料の不明瞭さは否めない。

いずれにしても遺物の包含層は、T層（淡褐色土層）で、一部にはO層（黄色土層）にくい込んだ状態をみせるものも存在する。

さて、石器の器種別の分布状況と接合関係について、別添第2図を参考にしてみたい。第1ユニットA群では、大形の剥片同志での接合は若干例あるものの、明確な石核に相当する資料は希少である。すなわち、旧谷川筋に転石として存在する大きな下呂石を母岩とし、まず節理面を利用して板状に剥離しているようで、そこから不定形の大形剥片を作出する。ただ、石材が縞文様をもつ、やや軟弱なものであるためか、横長な剥片が多い。これらの大形剥片を素材として次に記述する段階を経て、「尖頭器」を製作している。

尖頭器未成品とした14や15は、その第1段階で、14は原位置での接合関係を示している。15では、剥片16～19までがB3区内で接合する。そして素材の調整剥離を行なったのち、E2区へ移動して側縁加工（20）を開始している。すなわち尖頭器の成形開始であり、石器の加工作業がA群からB群へと移動するシステムの一端をのぞかせている。次に10、5、12、8などが第2段階にあたり、10の尖頭器未成品と尖頭器剥片11の接合資料でみるような、両面からの剥離成形が繰り返される訳であるが、A群での主な作業と推測される。B群およびC群では、成形が進み、細かな打ち欠き剥離面をみせて小形化した第3段階となる（3）。さらに、押圧剥離の加わる最終段階となり、2、4などがその資料である。なお、1はA群から、そして3の2点は、A・B両群間で接合した結果を考えるとき、かなり複雑な関係をも示唆している。ただ、打ち欠きに使用される叩石群が、A群に集中する傾向をみせ、B群に存在しない点、加えてC群での押圧具（43）の存在を考慮すれば、おおよそA群からB、C群への作業システムを想定してもよさそうである。B群のE、Fの1、2区に跨って位置する台石様の扁平な板状自然石は、その下に全く遺物が存在しないことなどから、当初より配置されていたものと推定する。以上、縞文土器片（48）と有舌尖頭器片（4）の存在から、縞文時代草創期に属する尖頭器製作址と考えられる。

第2ユニットについては、部分的なため、やや不明瞭ながら同様の内容と考えておきたい。ただ、第1ユニットの原石と異なり、やや硬質な下呂石が多く利用されている。

2、N8トレンチ（別添第3図） 同トレンチは、幅4m、長さ11mの44m²のほぼ中央部分において遺物が集中して出土した。全てT層とした淡褐色土層であるが、一部には肉視的に、O層とした黄色土層にくい込んだ例もある。しかし、基本的にはT層中と理解している。T層の厚さは、東から西方向へと10～15cmと厚くなるものの、その傾斜は15～17度を示し、前述のK6トレンチおよび、拡張部の11度前後に比較するとき、かなりの急斜面とみなされよう。遺物の集中部は、別添第3図の右下に示した略図（破線部分）とA～D、5～7区での縦、横の断面図で明示した。およそ4,300点にのぼる遺物は、大まかな器種ごとにマーキングして表したが、丸印での剥片、削片が圧倒的な量を占めている。また、剥片中で、使用痕の認められる剥片は、別に四角印としたが、そのほとんどが縦長剥片であり、黒丸印の石核が、石刃技法という安定した作出状況と対応する。ところが、星印で示した石器類や、尖頭器に関する剥片、削片（三角印）は希少である。残念ながら、時間的な制約と石材（下呂石）の関係上、徹底的な接合は出来なかったが、B6、7区～D6、7区での接合資料D（85～88）とE（89～92）でみるような結果が得られた。両者はいずれも、石核から剥片への接合状況が、大まかに上方から下方への方向を示している。そして中央部の浅い

谷部での出土状態が、三～四重の重なりをみせた事実を考慮するとき、N8トレンチにおける遺物分布と集中部の実体がみえてくる。すなわち、N8トレンチの一段上の、東側林野地からの流れ込みである。地主によれば、過去（江戸期）から水田はなかったとの証言もあり、現状でも林野地の斜面感はゆるやかである。なお、叩石がまったく見られなかった点にも注目しておきたい。

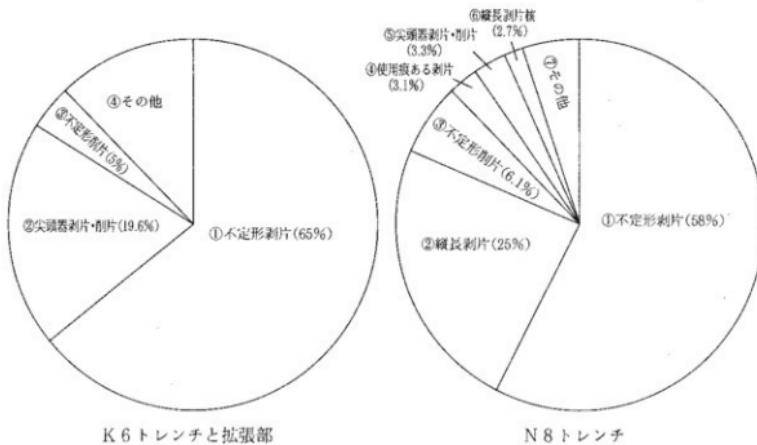
以上の観点から、N8トレンチにおける遺物群は、本来的には上部（東部）に存在するであろう石器製作址からの流れ込みと推測した訳である。

では、その石器群の石材、技法、組成などをみてみよう。それはまず、石刃技法の素晴らしさである。東海三県（愛知、三重、岐阜）では、今までに類例を見ないほどである。円錐形、円柱形の石刃核の多くは、北海道、長野におけるそれと見まがうほどのテクニックをみせている。それに伴う大小の縦長剥片の量も膨大である。ところが、いざ接合作業（約2ヶ月間）で体验した感想では、肝心の石刃がほとんど無いためと、流れ込み資料である故にか、接合は極めて困難であった。一方、接合資料D、Eのような目的的剥片、すなわち真正な石刃を作出することが出来なかった石核と剥片が、接合した例に恵まれたからこそ、逆にその内容を推測するに至ったのである。

垂直に打ち欠く剥離作業によって、結果的にはまっすぐで、一～二の稜を有した薄手の縦長剥片が、いわゆる真正な石刃である。ところが、出土遺物を詳細に検討したものの、驚くほど少量であった（97～104）。要するに石刃技法から連続して作出される真正な石刃は、そのほとんどが他所へ搬出され、目的以外の剥片のみが残されたわけである。その剥片は、側面は弓状に曲り、断面が分厚く、剥片作業途中の失敗品である。

さて、以上に述べたN8トレンチの状況から、本来の石器製作址あるいは居住地は、東側林野地と推測され、過去未耕作地である可能性も高いことを考慮するとき、かの地域での保存状態が期待されよう。

次に、K6トレンチおよび拡張部と、N8トレンチでの出土遺物の器種別な数値について、比較検討してみよう。第36図の円グラフがそれである。K6では、尖頭器製作にかかる尖頭器剥片、削片が20%ちかくを占めている。一方N8では、石刃技法を示す縦長剥片、同石刃核、使用痕ある剥片が31%となり、両者はその性格を大きく異なる実体がうかがえよう。



第36図 遺物器種別の比較グラフ

第3章 下呂石の風化と土壤

石器や剥片は、表面の風化の状態で現代の割れ面か古い割れ面かを判断するが、チャートのようにはほとんど風化しない石材や、黒曜石のようにわずかに風化する石材は判断が難しいものもある。その反面、頁岩や下呂石は風化が顕著でわかりやすい性質がある。下呂石は通称名で、岩石としては流紋岩の仲間である。

今回の大林遺跡の調査では、尖頭器を主体とするK6トレンチおよびその拡張部と、石刃を主体とするN8トレンチとに遺物が集中がみられるが、ともに下呂石を石材として用いて同時期の石器と考えられるが、風化の状態に差があるように見受けられる。K6トレンチは、尖頭器を製作する目的で横剥ぎの剥片を主体とし、また、横剥ぎしやすい石材をあえて使用している。N8トレンチで使用されている石材は、緻密で縞模様や節理などの不純物のない良質なもので、石刃の稜線が形成しやすいと考えられる。しかしながら、N8トレンチで出土した石器は下層にもかかわらず風化の頻度が少ないように見受けられる。一説には、風化の度合いによって時代の古さを判断できると云うが、N8トレンチでは適用しがたいと考えられる。石材の風化は、一般的には表面の酸化による化学変化の進行による変色があるので、石器が長時間保存をされていた土壤の状態に何らかの意味があるのではないかと、土壤のpHの測定をした。

測定方法は、測定サンプルを4層に分け、上層より表土H、黒色土層C、淡褐色土層T、黄色土層Oとし、それぞれの土50gに水（蒸留水）100gをまぜ攪拌後、測定器pHScan3を用いて測定を行った。測定結果は第4表である。比較の為、混入した蒸留水と、一般家庭の水道水のpHを測定した。pH値は、7を基準に数字が大きくなるとアルカリ性で、小さくなると酸性となる。測定の結果、土壤の土質は上層になるほど酸性になることになり、いわゆる上層の土中にある石器ほど酸化が進むことになる。しかし、風化することは土壤だけでなく、今回の他のトレンチの出土遺物と対比して観察し、同じ条件で風化が進行するとなれば、1番目に石材、2番目に土壤の状態、3番目に時間によって影響されると考えられる。あるいは土壤の状態が一番影響する要因なのかもしれない。ともかく時間だけで風化を決定つけることはできない、風化の状態で時代を特定することは不可能であるといえる。

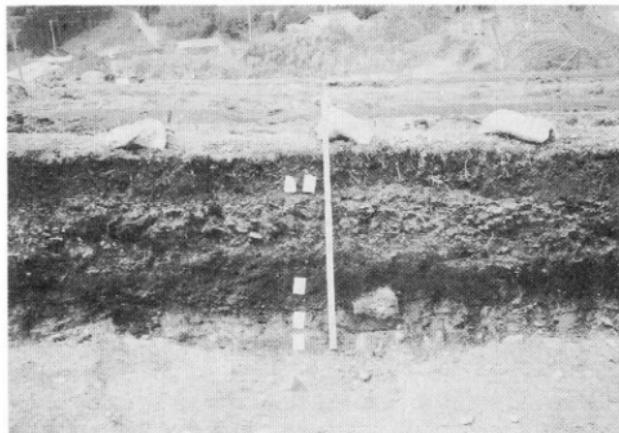
pH測定結果

酸性 < 7 < アルカリ性

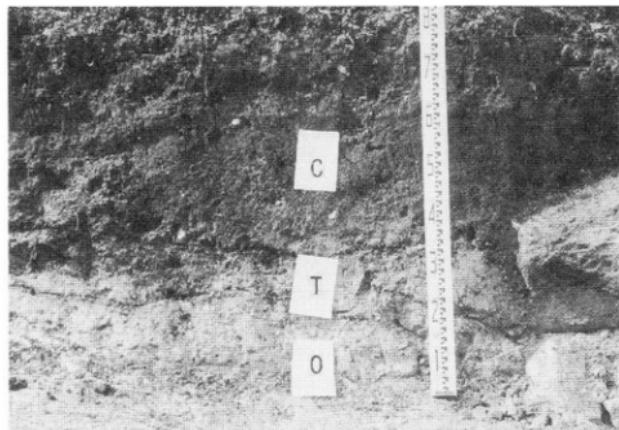
N8トレンチ西壁 層位	H	C	T	O	水道	蒸留水
水100cc 土50 g 10分後	5. 4 4	5. 7 5	6. 1 1	6. 3 7	7. 1 0	6. 4 0
30分後	5. 3 4	5. 6 7	6. 0 1	6. 3 1	6. 7 5	6. 3 2
2時間後	5. 4 8	5. 6 9	6. 1 1	6. 4 0	6. 8 7	6. 4 0
3時間後	5. 4 4	5. 6 5	6. 0 9	6. 3 5	6. 9 2	6. 3 1
平均値	5. 4 2	5. 6 9	6. 0 8	6. 3 5	6. 9 1	6. 3 5

(01.11.5 後藤)

第4表 土壤測定表



1. 表土 (H) は最上段の二列



2. 搅乱層下の黒色土層 (C), 淡褐色土層 (T), 黄色土層 (O)

第37図 N 8 トレンチ西壁の土壤採取部分

第4章 結語

本調査は、あくまでも耕地整理に伴なう試掘調査であり、第3図で示したように対象となりうる水田、畑の安定した地形と、聞きとりによる表探情報に基づいて、できる限り数多くのトレントを設定、調査した。Kトレント群は、中央南西にのびた舌状部よりも、K6トレントと拡張部のような、旧谷川付近の斜面に運よく残存部分が検出されている。しかしながら、他のトレントではその遺存度が悪い。

Nトレント群においては、より急傾斜面が多く、前述のようにN8トレントに集中部を検出したものの、本体は東上方林野地と推測される。幸い保存地域とのことであり喜ばしい。

Sトレント群では、Nトレント群よりさらに急な傾斜を示し、条件は一層悪く思われる。

大林遺跡の遺物包含層は、表土(H層)下の黒色土層(C層)と、その下の淡褐色土層(T層)が基本であり、比較的単純である。最も包含するT層は、いわゆるローム層ともいわれるが、その方面による今後の詳しい検討が期待される。なお、各層中のペーハー化学分析については、第3章で報告したような事実が明らかとなり、表探などによる下呂石製石器の風化度の強弱と年代差については、下層ほど弱いという結果をみた。いわゆる石材の質的要素が、より重要との認識を新たにした。

槍先形尖頭器の製作址と推測したK6では、一片ながら確実に土器と有舌尖頭器片が出土しており、縄文時代草創期の所産と判明した点は重要である。そして、谷川からの下呂石採取から素材作りに始まって、各段階を経て成品に至るまでの良好な資料が得られた。さらに剥離具である叩石が多量に伴ない、また下呂石製の押圧具の出土は好運と言えよう。K17の70、71による湧別技法の素晴らしい資料は、真に北海ルートの証左と言えよう。

N8における石刃技法による石器群、特に搬出されたと思われる石刃の行方。そして手斧形石斧未成品とした82、83、111(N4)や、N7出土の丸のみ形石斧未成品(114)などの実態等々、興味深い問題が次々と想い浮ぶ。今後の研究を待ちたい。

極暑の7月から霜寒の11月まで、標高700mの現場で、共に奮闘頂いた飛騨の皆さまに、心から御礼申し上げ、筆を置きたい(吉田)。

〔参考文献〕

- 初矢遺跡採集のナイフ形石器「岐阜県考古7」鈴木忠司、片田良一、1979
- 飛騨湯ヶ峰山麓の旧石器資料「飛騨と考古学」飛騨考古学会、1995
- 湯ヶ峰山麓のナイフ形石器「どっこいし53」 飛騨考古学会、1996
- 大林遺跡のナイフ2例「どっこいし56」 飛騨考古学会、1997
- 大林遺跡の旧石器「どっこいし57」 飛騨考古学会、1998
- 各務原台地とその周辺の旧石器(1)~(3)「旧石器考古学44~46」沢田伊一郎 1992,1993
- 飛騨の大形・中形尖頭器について「どっこいし50」吉朝則富,1995
- 飛騨・湯ヶ峰山麓の尖頭器資料「飛騨と考古学II」井上善六・小鳩準一・吉朝則富,2001
- 下呂町大林遺跡の旧石器新資料「飛騨と考古学II」井上善,2001
- 大林遺跡採集の尖頭器について「飛騨と考古学II」出口剛・有本昭子・有本雅己,2001
- (速報) 飛騨下呂石原産地における大形尖頭器製作跡について「長野県考古学会会誌」吉朝則富

第5表 遺物観察表（1）

※（ ）内の数値は推定長、紫輝安は紫蘿輝石安山岩

番号	器種	とりあげ番号	トレンチ	層位	大きさ(mm)	重さ(g)	既存度	石材	接合関係他
1	尖頭器	5356	K6	淡褐色	85(110)×33×4	36	2/3	下呂石	
2	尖頭器	4250・3470	K6	淡褐色	122×44×14	66		下呂石	2点
3	尖頭器未成品	3656・1242	K6	淡褐色	153×71×21	206		下呂石	2点
4	有舌尖頭器	4287	K6	淡褐色	67(100)×25(40)×10	14	1/3	下呂石	
5	尖頭器未成品	589	K6	淡褐色	64(150)×72×21	102	1/3	下呂石	
6	尖頭器未成品	4212	K6	淡褐色	52(130)×60×28	78	1/3	下呂石	
7	尖頭器未成品	4383	K6	淡褐色	79(180)×76×18	120	1/3	下呂石	
8	尖頭器未成品	820	K6	淡褐色	114(200)×110×54	552	1/2	下呂石	
9	尖頭器未成品	西壁下	K6	淡褐色	100(140)×76×38	285	1/2	下呂石	
10	尖頭器未成品	3023・4057	K6	淡褐色	183×86×43	664		下呂石	2点
11	尖頭器剥片	4100	K6	淡褐色	24×43×7	12		下呂石	10と接合
12	尖頭器剥片? (手席)	627・3318	K6	淡褐色	168×86×40	560		下呂石	2点
13	船底形石器	805	K6	淡褐色	140×71×41	392		下呂石	
14	尖頭器未成品	761・759・707	K6	淡褐色	193×190×55	1305		下呂石	3点
15	尖頭器未成品	3274・3322	K6	淡褐色	238×120×59	1305		下呂石	2点
16	剥片	1181	K6	淡褐色	62×54×27	86		下呂石	15と接合
17	剥片	617	K6	淡褐色	180×63×37	288		下呂石	15・20と接合
18	剥片	1187	K6	淡褐色	98×63×25	104		下呂石	15・19と接合
19	剥片	588	K6	淡褐色	69×42×26	56		下呂石	15・16・18と接合
20	剥片	821	K6	淡褐色	92×50×34	142		下呂石	15・17と接合
21	叩石	3399	K6	淡褐色	56×55×24	210		紫輝安	風化つよい
22	叩石	525	K6	淡褐色	70×52×30	210		流紋岩	
23	叩石	1093	K6	淡褐色	62×50×42	170		流紋岩	
24	叩石	420	K6	淡褐色	63×64×50	280		流紋岩	
25	叩石	4218	K6	淡褐色	67×61×48	270		流紋岩	
26	叩石	494	K6	淡褐色	75×63×43	303		流紋岩	
27	叩石	480	K6	淡褐色	88×67×69	515		紫輝安	風化著しい
28	叩石	779	K6	淡褐色	100×70×50	418		流紋岩	
29	叩石	西壁下	K6	淡褐色	91×73×68	627		流紋岩	
30	叩石	1095	K6	淡褐色	90×74×38	370		流紋岩	
31	叩石	433	K6	淡褐色	70×64×53	350		流紋岩	
32	叩石	487	K6	淡褐色	80×61×40	283		流紋岩	
33	叩石	688	K6	淡褐色	98×94×76	1030		紫輝安	風化少々
34	叩石	1127	K6	淡褐色	69(73)×55×60	305	一歇	流紋岩	
35	叩石	西壁下	K6	黒色	74(76)×57×45	245		流紋岩	
36	叩石	844・1165	K6	淡褐色	98×67×53	460		流紋岩	2点
37	叩石	561	K6	淡褐色	80×56×63	372		流紋岩	
38	叩石	4376	K6	淡褐色	106×81×70(78)	828	4/5	流紋岩	
39	叩石	526	K6	淡褐色	95×79×52	560		流紋岩	
40	叩石		K6	黒色	85×87×58	445		流紋岩	
41	叩石	1130	K6	淡褐色	102×85×50	497		流紋岩	

第6表 遺物観察表(2)

番号	器種	とりあげ番号	トンネ	層位	大きさ(mm)	重さ(g)	残存度	石材	接合関係他
42	叩石	718	K6	淡褐色	105×90×85	1072		紫輝安	
43	押圧具	3424	K6	淡褐色	80×40×33	158		下呂石	
44	叩石	3745	K6	淡褐色	118×113×83	1360		紫輝安	
45	打製石斧		K6	黒色	139×55×21	225		砂岩	磨滅痕多い
46	翼状剥片核		K6	黒色	97×37×21	59		下呂石	
47	石鎌		K6	表土	22.5×16×3			下呂石	風化つよい
48	土器		K6	淡褐色	74×68×14		破片	下呂石	縄文・沈線文
49	尖頭器未成品	1	K14	黒色	113×49×25	118		下呂石	
50	尖頭器未成品		K15	表土	47(130)×36×12	20	1/3	下呂石	
51	尖頭器未成品	1540	K14	淡褐色	53(120)×36×12	22	1/3	下呂石	
52	尖頭器未成品		K16	表土	54(100)×34×16	22	1/2	下呂石	
53	尖頭器未成品		K16	黒色	65(100)×34×12	21	1/2	下呂石	風化
54	叩石		K15	表土	71×62×36	210	一歛	流紋岩	
55	尖頭器未成品		K16	黒色	52(80)×28×11	13	1/2	下呂石	風化つよい
56	尖頭器未成品	北	K16	淡褐色	85(200)×88×28	172	1/2	下呂石	
57	尖頭器未成品	北	K16	淡褐色	72(150)×53×23	90	1/2	下呂石	58と接合
58	尖頭器剥片	北	K16	淡褐色	59×55×11	24		下呂石	57と接合
59	尖頭器未成品		K17	表土	59(80)×39×13	30	1/2	下呂石	
60	尖頭器未成品		K17	黒色	52(120)×36×11	20	1/3	下呂石	
61	尖頭器		K18	黒色	52(90)×28×13	18	1/2	下呂石	風化
62	叩石		K18	表土	87×62×37	280		砂岩	
63	角錐状石器未成品		K18	表土	155×85×61	622		下呂石	
64	翼状剥片		K7	黒色	58(80)×31×11	22		下呂石	
65	ナイフ形石器		K13	黒色	39(70)×20×7	6		下呂石	やや風化
66	石鎌		K14	表土	26×15×3			下呂石	尖端に造り出し
67	石鎌		K16	黒色	15(27)×17×3		3/5	下呂石	
68	石鎌		K15	表土	26×17×2			下呂石	
69	石鎌		K20	黒色	33×20×3.5			下呂石	
70	側面調整剥片		K17	表土	31(45)×5×4		2/3	下呂石	71と同定
71	船底形細石刃核		K17	表土	59×35×9	2		下呂石	湧別型
72	尖頭器未成品		N8	表土	95(180)×53×16	90	1/2	下呂石	
73	尖頭器未成品	2146	N8	淡褐色	102×47×18	88		下呂石	
74	尖頭器未成品	2798	N8	淡褐色	130(140)×48×27	144	一歛	下呂石	
75	尖頭器未成品		N8	表土	95×43×16	54		下呂石	
76	搔器	2008	N8	淡褐色	62×54×22	66		下呂石	
77	尖頭器未成品		N8	表土	167×76×45	490		下呂石	
78	尖頭器未成品	2196	N8	淡褐色	102(200)×80×42	280	1/2	下呂石	
79	削器	2475	N8	淡褐色	60(80)×46×13	34	2/3	下呂石	
80	搔器	4742	N8	淡褐色	89×60×27	124		下呂石	
81	抉入搔器	3828	N8	淡褐色	90×51×25	88		下呂石	
82	手斧形石斧未成品	4915	N8	淡褐色	118×78×30	292		下呂石	

第7表 遺物観察表(3)

番号	器種	とりあげ番号	トレチ	層位	大きさ(mm)	重さ(g)	残存度	石材	接合関係他
83	手斧形石斧未成品	3875	N8	淡褐色	106×75×22	224		下呂石	
84	彫器	3771	N8	淡褐色	101×63×29	204		下呂石	
85	石刃核	2448	N8	淡褐色	78×65×46	246		下呂石	86~88と接合
86	打面調整剥片	4737	N8	淡褐色	99×62×29	136		下呂石	85・87と接合
87	剥片	2438	N8	淡褐色	72(90)×37×19	42	2/3	下呂石	85・86・88と接合
88	剥片	2650	N8	淡褐色	77(100)×27×16	30	3/4	下呂石	85・87と接合
89	剥片	2810	N8	淡褐色	75(95)×36×19	58	3/4	下呂石	90・91と接合
90	側面調整剥片	4733	N8	淡褐色	79×24×19	36		下呂石	89と接合
91	石刃核	2429	N8	淡褐色	115×66×41	386		下呂石	89・92と接合
92	剥片	3944	N8	淡褐色	76×29×12	34		下呂石	91と接合
93	石刃核	2208	N8	淡褐色	85×75×42	254		下呂石	
94	打面調整剥片	2945	N8	淡褐色	74×68×17	100		下呂石	
95	打面調整剥片	1914	N8	淡褐色	111×35×25	74		下呂石	
96	側面調整剥片	5124	N8	淡褐色	127×35×22	90		下呂石	
97	石刃	4761	N8	淡褐色	52×25×6	6		下呂石	
98	石刃	4611	N8	淡褐色	70×36×8	18		下呂石	
99	石刃	2293	N8	淡褐色	59×34×10	24		下呂石	使用痕
100	石刃	1927	N8	淡褐色	72×36×8	22		下呂石	使用痕
101	石刃	2660	N8	淡褐色	71(100)×29×11	22	3/4	下呂石	
102	石刃	1944	N8	淡褐色	60×34×14	20		下呂石	使用痕
103	石刃	2268	N8	淡褐色	82(90)×31×8	20	1/5	下呂石	使用痕
104	石刃	2024	N8	淡褐色	50(70)×27×4	8	2/3	下呂石	使用痕
105	細石刃核	2390	N8	淡褐色	98×29×25	86		下呂石	
106	細石刃	4602	N8	淡褐色	26(35)×9×2		3/4	下呂石	
107	細石刃	1925	N8	淡褐色	17(30)×4×1.5		1/2	下呂石	
108	細石刃		N8	淡褐色	17(30)×8×1.8		1/2	下呂石	
109	細石刃		N8	淡褐色	15(30)×12×1.8			下呂石	
110	船底形細石刃核		N8	表土	73×42×44	138		下呂石	
111	手斧形石斧未成品		N4	表土	102×82×38	356		下呂石	
112	彫器		N7	表土	72×22×13	18		下呂石	
113	彫器		N7	淡褐色	70×38×12	32		下呂石	
114	丸のみ形石斧未成品		N7	表土	122×34×27	118		下呂石	
115	彫器		N7	淡褐色	117×51×22	116		下呂石	
116	尖頭器未成品	1435	N9	淡褐色	140×51×23	150		下呂石	
117	尖頭器未成品		S1	黒色	68(150)×58×14	62	1/3	下呂石	
118	角錐状石器		S1	黒色	70(120)×35×25	46	1/2	下呂石	風化つよい
119	ナイフ形石器		S1	表土	36(90)×30×13	16	1/3	下呂石	



A～D地点は過去の表採による。 K.N.Sは今回の試掘調査

図版 1 大林遺跡空中写真



1. K1 レンチ (南東より)



2. K1 トレンチ, SK1 (南西より)



1. K6 トレンチ東壁



2. K6 トレンチ西壁



1. K 6 トレンチ遺物集中状況（西より）



2. 同上（南より）



1. K 6 トレンチ南拡張部遺物集中状況（西より）



2. 同上（南より）



1. K 6 トレンチ遺物集中状況（南より）



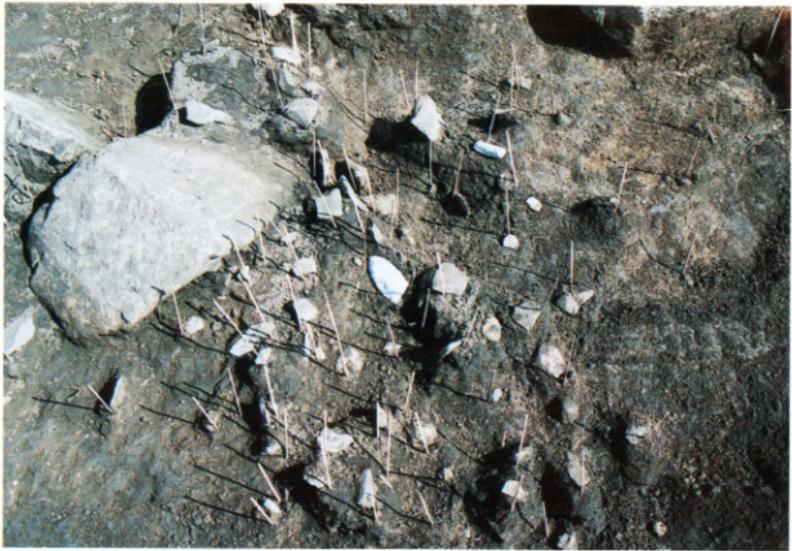
2. 同上, 荒割り（西より）



1. K6 トレンチ出土の土器 (48)



2. 同上, 石器 (3)



1. K 6 トレンチ南拡張部の石器（2）



2. 同上, 石器（4）



1. K 6 トレンチ南拡張部の西壁



2. 同上の遺物包含状態



1. K14トレンチ（西より）



2. K10・11トレンチ（南より）



1. Nトレンチ群（北より）



2. Sトレンチ群（北より）



1. N 2 トレンチ北壁



2. N 3 トレンチ北壁



1. N4 トレンチ北壁



2. N5 トレンチ北壁



1. N 6 トレンチ北壁



2. N 7 トレンチ北壁



1. N8トレンチ西壁



2. 同上・北壁



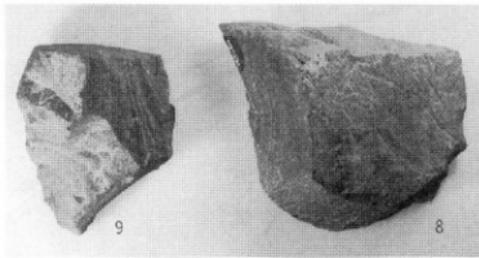
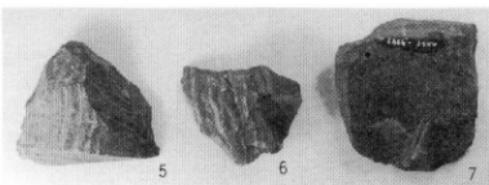
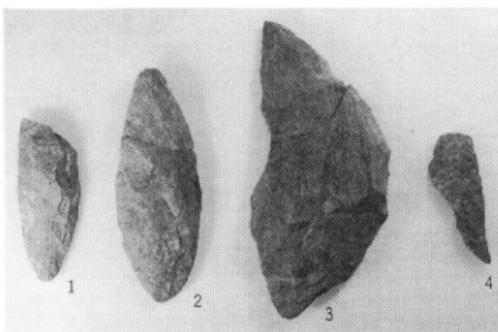
3. 同上・西壁の南寄り



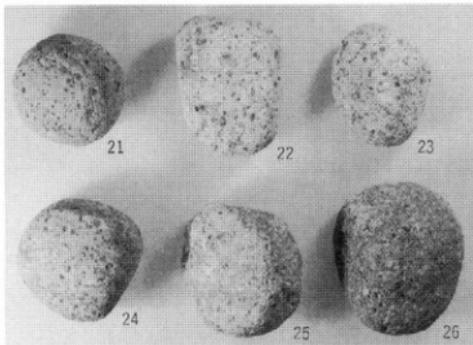
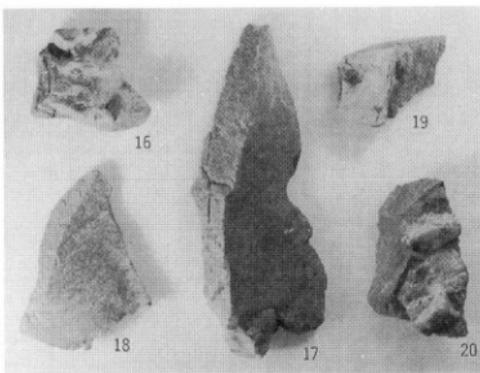
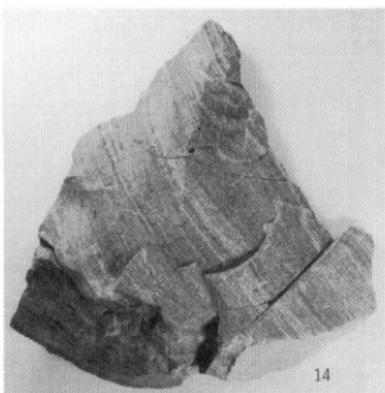
1. N9トレンチ西壁



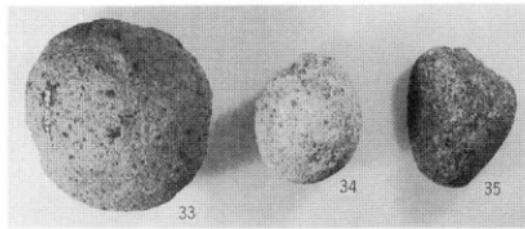
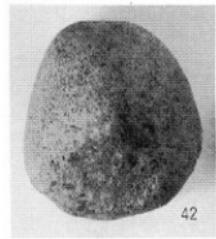
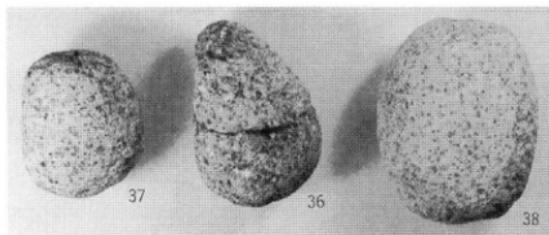
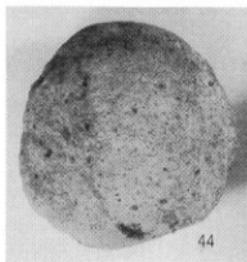
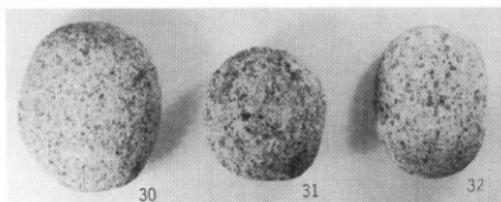
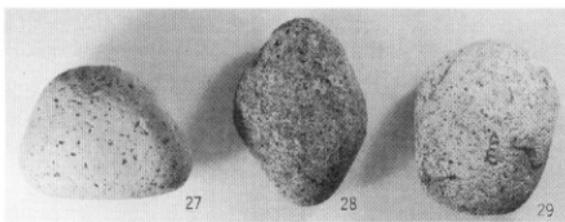
2. N10トレンチ北壁



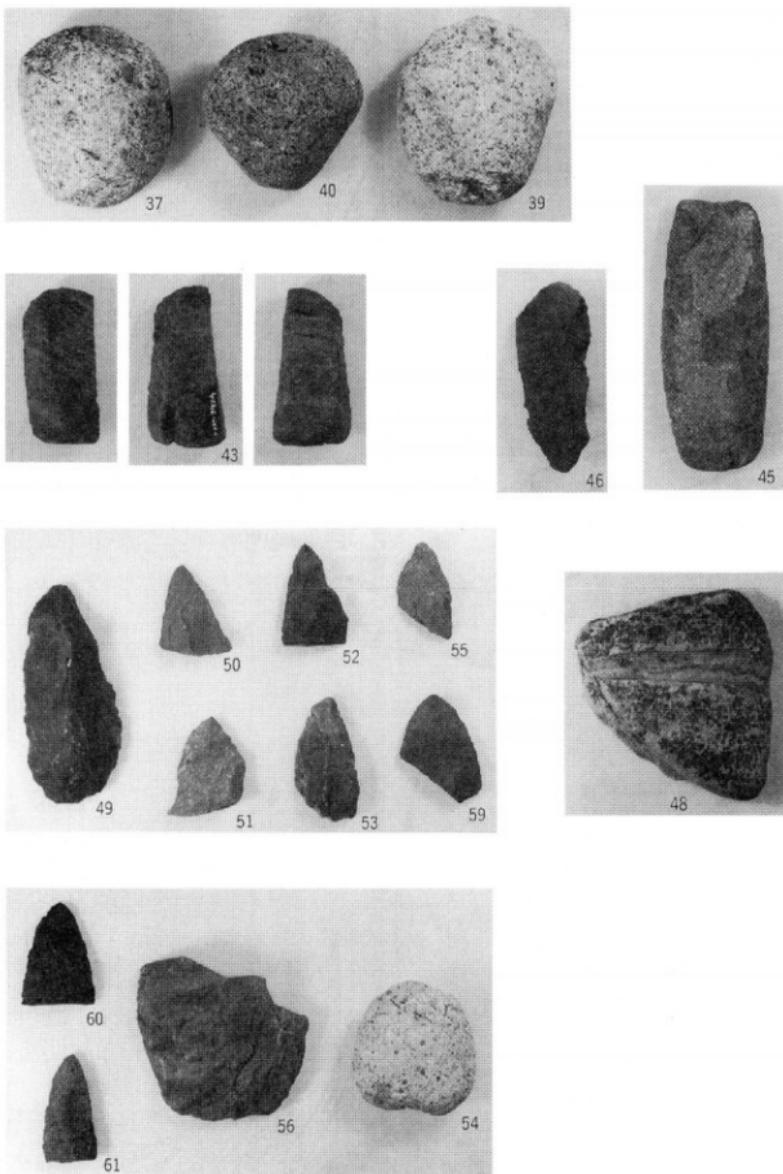
図版17



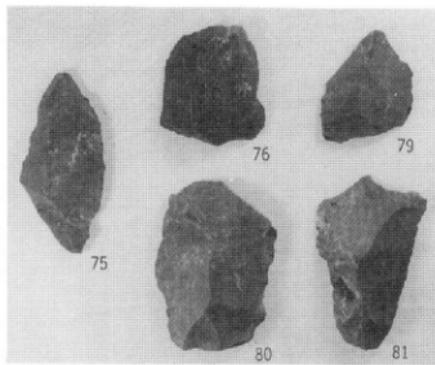
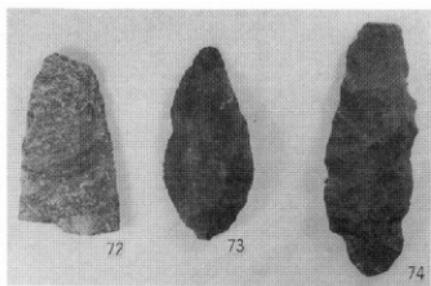
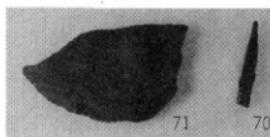
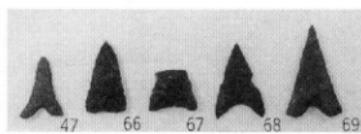
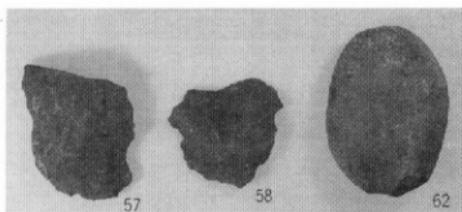
図版18



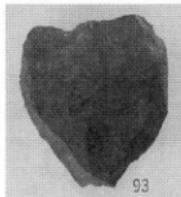
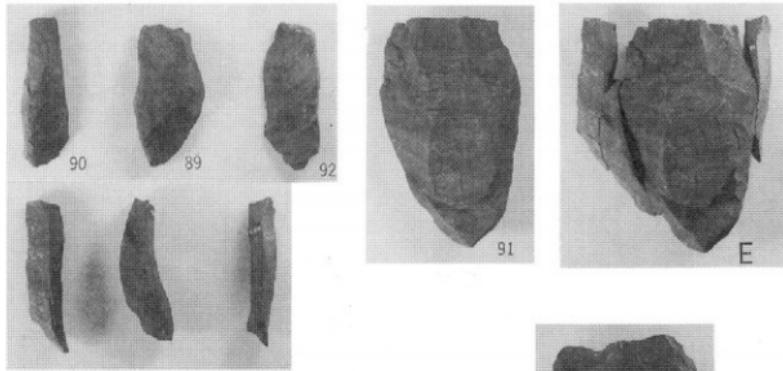
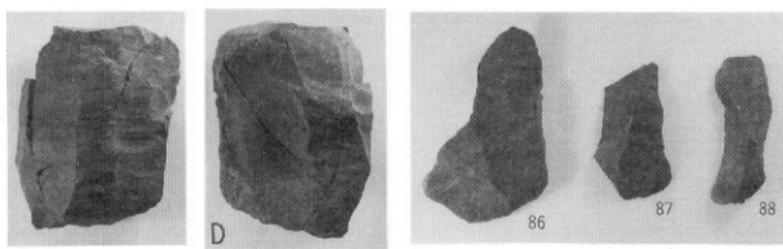
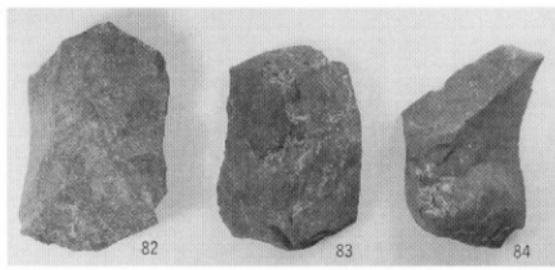
図版19



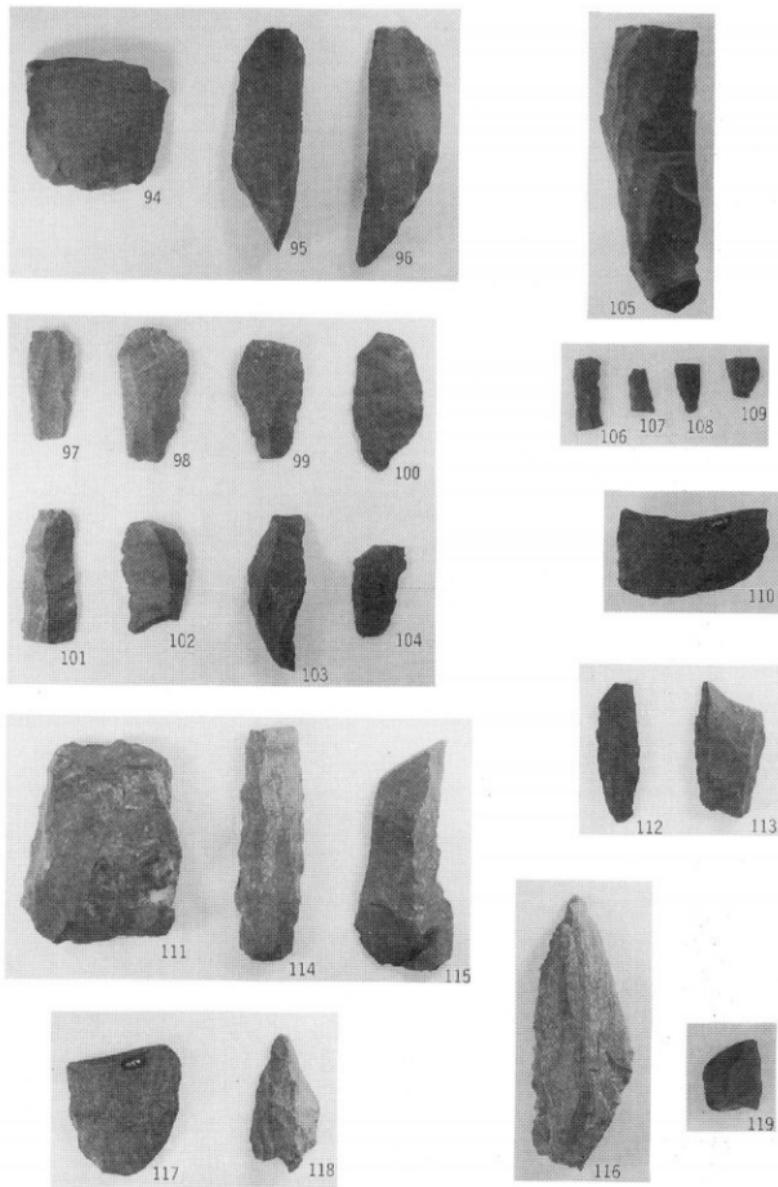
図版20



図版21



図版22



図版23

大林遺跡試堀調査報告書

平成14年3月8日発行

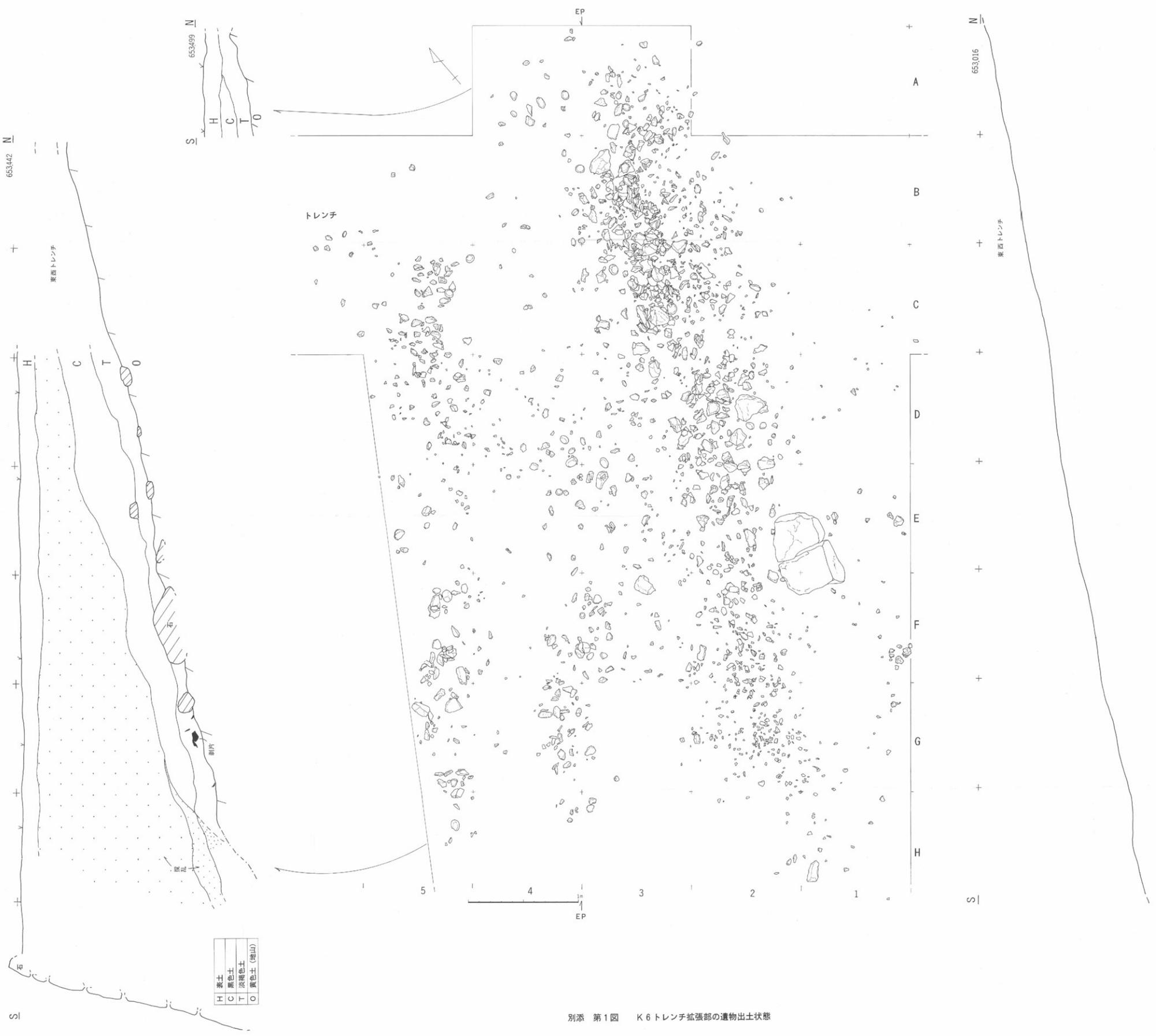
発 行 岐阜県益田郡下呂町森

〒509-2202 TEL(0576)25-2252

下呂町教育委員会

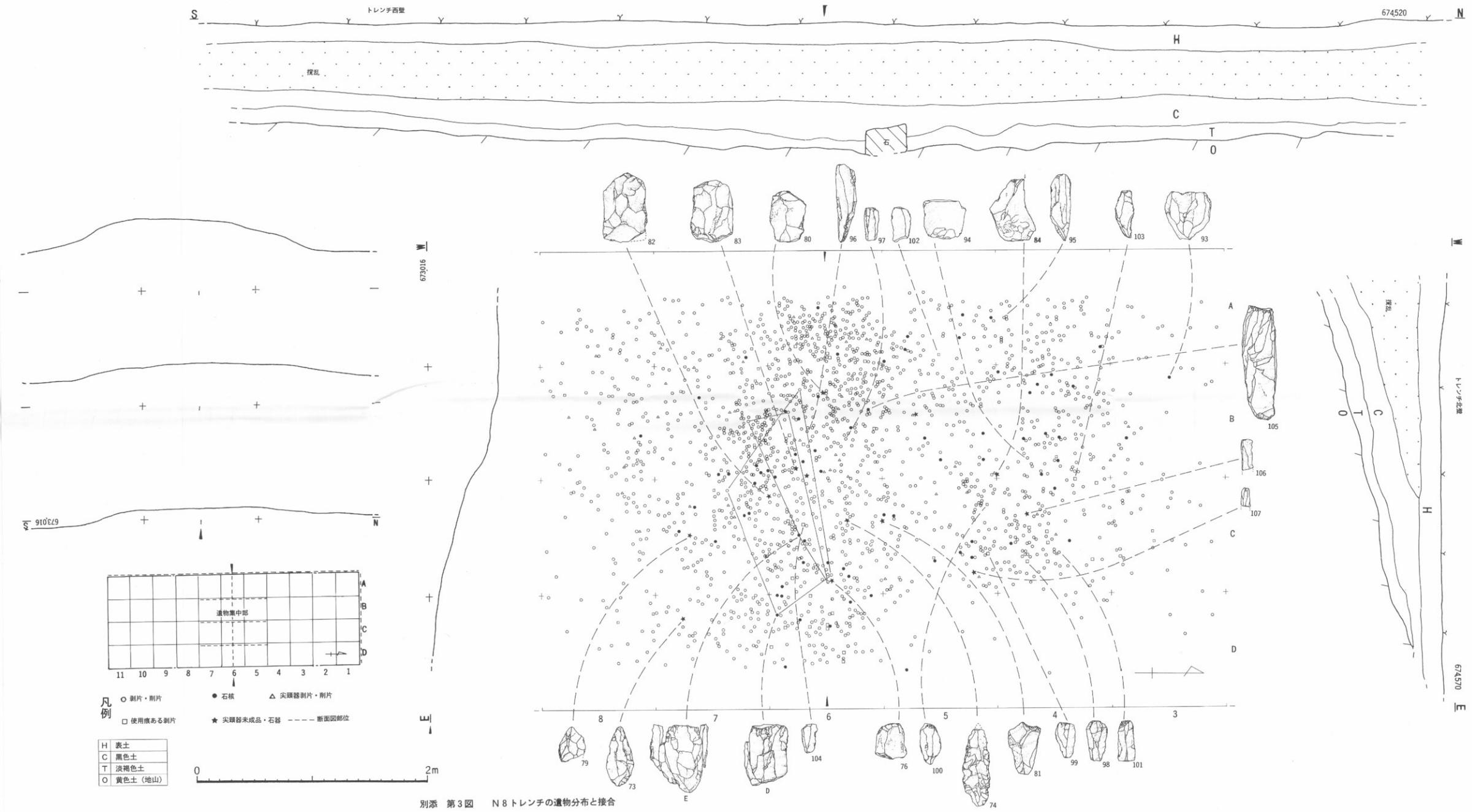
印 刷 岐阜県関市本町2丁目4

中 部 印 刷 (株)





別添 第2図 K 6 トレンチ拡張部、出土遺物の分布と接合



別添 第3図 N8トレンチの遺物分布と接合

